

日本韓国研究

特集号

コロナ禍の韓国・朝鮮関連授業の実践報告

韓国語教育におけるオンライン授業の実践報告

—課題と可能性について—

朴 庾卿 (Yukyung Park)

コロナ禍における「遠隔型授業」の実践報告

—従来の対面型授業との比較を中心に—

仲島 淳子 (Junko Nakajima)

コロナ禍での朝鮮史オンラインゼミ運営報告

大槻 和也 (Kazuya Otsuki)

비대면 수업에서의 manaba 활용 사례

최 은경 (Eunkyung Choi)

ニューノーマルな韓国・朝鮮語授業に向けて

—ネット配信授業の実践—

趙 智英 (Jiyoung Cho)

日本韓国研究会第1回例会後記

日本韓国研究会運営委員

2021年3月

日本韓国研究

特集号

コロナ禍の韓国・朝鮮関連授業の実践報告

2021年3月31日

日本韓国研究会

Japan Association of Koreanology

目次

■実績報告

韓国語教育におけるオンライン授業の実践報告

—課題と可能性について—

朴 庚卿 (Yukyung Park) 3

コロナ禍における「遠隔型授業」の実践報告

—従来の対面型授業との比較を中心に—

仲島 淳子 (Junko Nakajima) 15

コロナ禍での朝鮮史オンラインゼミ運営報告

大槻 和也 (Kazuya Otsuki) 27

비대면 수업에서의 manaba 활용 사례

최 은경 (Eunkyung Choi) 32

ニューノーマルな韓国・朝鮮語授業に向けて

—ネット配信授業の実践—

趙 智英 (Jiyoung Cho) 45

■日本韓国研究会第1回例会後記

日本韓国研究会運営委員 55

韓国語教育におけるオンライン授業の実践報告

— 課題と可能性について —

朴 庚卿（明治学院大学 他）

<要旨>

本稿は、韓国語教育におけるオンライン授業の実践報告である。2020年度コロナ禍で行ったオンライン授業の進め方や課題、学習度評価方法とその基準などをまとめ、4回のアンケート結果からオンライン授業の課題と可能性を示したものである。韓国語学習における新たな可能性として①録音課題による発音指導、②オンライン授業においてブレイクアウト機能を使ったグループワークの活性化を挙げることができる。また、より効率の高いオンライン授業のために改善すべき課題は①負担にならない程度の課題の量、②課題や小テストだけに頼らない学習度評価方法を工夫する、③不正行為を防ぐテストの方法を考える、④発言しやすく、質問しやすい、環境を作る、⑤オンライン授業だからこそ活用しやすい反転授業を積極的に取り入れることである。

キーワード 韓国語教育、オンライン授業、録音課題、ブレイクアウト

1. はじめに

本稿は、韓国語教育におけるオンライン授業の実践報告である。新型コロナウイルスの影響により対面式授業からオンライン授業へ転換を迫られることになった2020年度に行った授業において、授業の進め方や課題、成績評価方法やその基準などをまとめ、4回のアンケート結果からオンライン授業の課題と可能性を考えることを目的としている。

2. 授業の進め方及び成績評価の基準

本報告は2020年度大学で担当した第Ⅱ外国語（選択必修）韓国語科目「韓国

語1A・1B]、「韓国語2A・2B」を対象としている¹。授業の開始は本来より2週間程度遅れた4月3週目からのスタートとなった。15回の授業が13回となりシラバスにずれが生じたが、本来、映画鑑賞や中間復習実施回としていた2回分の授業内容を調整し、計画していた15回分の学習範囲を無理なくこなすことができた²。

授業形態は、大学の学習管理システム（Learning Management System、以下LMS）をプラットフォームとしたZoomによるオンライン授業（同時配信）を行った。大学方針として「LMS+オンデマンド型」と「LMS+オンライン授業型」の2つの授業形態から選択が可能であったが、大学の韓国語研究所の方針従い、「LMS+オンライン授業型」で行うことにした。ただ、学習者も教師も初めてのオンライン授業であることから、大学では最初の2週間をオンライン授業の練習期間とした。これに従い、最初の2回の授業は1週間前にLMSを通して授業内容の PowerPoint（以下PPT）資料と課題（大学の韓国語研究所提供）を配布し、時間を短縮した形で練習を兼ねたオンライン授業を行った。この2回の授業は通信環境がまだ整っていない学習者を配慮し出席率には反映しなかった。1、2回の授業では、オンライン授業における注意事項及び授業の進め方などのオリエンテーションと基本母音を中心に授業を行った。3回目以降は90分間、PPT資料（筆者作成）と教科書のPDFファイルを共有し、対面授業の方式とほぼ変わらない内容で授業を行った。

なお、授業中のカメラオン・オフについては、語学の授業はコミュニケーションを取ることを目的としている点、また発音練習において口の形を確認する必要がある点から、春学期はやむを得ない事情がない限り全員カメラをオンにしての参加を基本とする授業を行った。しかし、秋学期はカメラオンを強制しないよう学校からの指針があったため、テスト以外はカメラオン・オフを自由にした。カメラをオフにした場合は、呼ばれてすぐ返事がないと早退として扱った。

授業形態の変更に伴い、それに相応する形で成績評価基準も変更した。学校で期末試験を行うことが難しくなり、学習理解度をどのように評価すればいいのか悩むところだったが、学校の指針を反映し課題と授業への参加度の割合を高く設定した。秋学期も語学関連授業などは春学期と同様オンライン授業で行う方針となった。秋学期には、評価項目の課題の割合を減らし評価基準もより細かく設定した。それは、後述するアンケートの結果の通り、春学期の学習度評価を課題に頼ったことによる課題の量が、学習者に負担につながったためである。その代わり授業内テストを含むテストの割合を高く設定した。詳細は表1

¹ 前期 1A と 2A、後期 1B と 2B をセットで受講し、週 2 回授業がある。

² シラバスの成績評価以外は大学の韓国語研究所で一律して調節を行った。

の通りである。

表1 韓国語科目の成績評価基準 (2020年度)

春学期			秋学期	
	韓国語 1 A	韓国語2A	韓国語 1B・2B	
授業への参加度 (出席)	10%	30%	授業への参加度 (出席を含めて総合的に判断)	30%
課題	50%	50%	課題 (1回: 100点満点) ※再提出 1回: -5点、2回: -10点、3回以上: -20点、再提出しない: -30点	20%
レポート	20%	—	授業内期末テスト (会話10%+筆記20%)	30%
小テスト	20%	20%	小テスト	20%

3. 授業への参加度

授業への参加度は、出席と授業中の受け答えなどを中心に総合的に判断した。出席の確認方法は、Zoom への入室時に待機室を設け、出席簿に登録されている自分の名前で参加するように指示した。学習者が待機室に入ると名前を確認した上で入室を許可する形で出席を確認した。参加者の入退室通知機能を設定し、学習者にも入退室の把握をしていることを認識させることで、やむを得ず退室する場合には学習者自らその理由を報告するようになった。

カメラオフの場合の注意事項として上述したように、呼ばれて返事がない場合は早退とした。それに対し学習者から通信障害により強制退室させられたなどの連絡があった。通信障害や体調不良による欠席などは欠席として扱わないのがオンライン授業における学校の指針であるため、このような報告がある場合は早退とはしなかった。ただ、通信障害を教師が直接確認することは難しい点、体調不良についても何が原因で体調不良なのか、単純な頭痛による欠席も出席として認められるのかなど、体調不良の範囲の判断基準が明確ではない点については対策が必要だと考えた。これを踏まえ、秋学期には欠席した理由についての報告がない者については欠席扱いすることを原則とし、「体調不良が原因の場合はそれが証明できるものを提出する」と明記し、少し緊張感を持たせた。なお、秋学期には学校でもオンライン授業を受ける環境が整ったので、家の通信障害を理由に頻繁に欠席をする学習者については、学校で授業を受け

るように指導した。

また、授業中には出席簿順番で一人 2、3 回程度、教師からの質問に答えなければならない。その受け答えを授業への参加度に反映させた。

4. 課題&レポート

春学期は、授業毎（13 回）に課題を課した。提出は、次回の授業の前々日までに LMS にファイルを提出させ、個別指導機能を使いすべての課題にフィードバックし、質問を受けたり、必要に応じて再提出させた。しかし、再提出に関する基準を設けておらず、提出しなくても評価に反映されなかったため、一部の学習者に再提出しない傾向があらわれた。これを踏まえ、秋学期には再提出について細かい基準を設け成績評価に反映させた（表 1 参照）。

課題は読み書きに重点を置き、前半の文字編では、単語を書いて読む練習（録音課題）、文法編に入ってから文法活用の練習を加えた①教科書の練習問題を解く（録音）、②本文会話を書いて日本語に訳して韓国語の発音変化を書く、③学習した文法を使って例文を作り、録音することを主な課題とした。そのほか、学習内容のまとめプリントを解く課題などもあった。課題②③はオンライン授業で初めて導入した類型で、授業中には発音の個別指導などは難しく、課題がなければ学習者が自ら書く練習をする確率は低いと判断した上での課題である。対面授業であれば、小テストを頻繁に行うことで、書く能力の向上にもつながるが、オンライン授業ではカンニングなどによりテストの公平性を保つことが難しいことから、小テストが必ずしも学習能力向上につながるとは言えないと判断した。結果的に春学期の課題量が多くなり、後述するアンケート結果の通り、課題は勉強になったが、量が多いという意見もあった。これを踏まえ秋学期には課題を半分減らし、テストの頻度を増やすことで自ら勉強する機会を与えた。

次に 2020 年度から設けられた韓国語科目の共通課題であるレポートについてである。韓国語 1A でのみ提出となっており、指定図書感想文である。このレポートは、オンライン授業による課題ではないので詳細は省くこととする。

表2 課題とレポート（2020年度）

	春学期	秋学期
課題	13回	平均7回
レポート	「韓国語 1A」のみ	なし

5. 小テスト&授業内期末テスト

5.1 テストの割合

小テストは成績評価の割合を20%と設定し、春学期は必要に応じて行い（4回）、秋学期は一つの課が終わるたびに行うことを基本とし、「韓国語1A」「韓国語1B」のいずれかでそれを実施、筆者は授業内期末テストを含めて5回実施した。

対面授業においてはほぼ毎回小テストがあり、期末試験は成績評価の50%を占めていた。しかし、オンライン授業においてはテストの不正行為を十分に監督できないため、公平性を保つことが難しい。それにより課題に頼って成績を評価せざるを得ないが、課題だけでは学習度を確認するには十分とは言えない。その結果秋学期には、課題を減らす代わりにテストの回数を増やす方法を選んだ。授業内期末テストは、期末試験を実施しない決定のため、全体の理解度を確認する目的で、秋学期に習った内容を試験範囲とし、担当教師の責任の下で、授業内で実施した期末テストである。

表3 小テストと授業内期末テスト（2020年度）

春学期	秋学期
小テスト4回 ①書き取り＋筆記テスト：2回 ②会話テスト2回	小テスト2、3回（書き取り＋筆記テスト） 授業内期末テスト ①会話テスト2回 ②書き取り＋筆記テスト1回

5.2 問題の種類とテストの方法

筆記テストの問題は、書き取り、翻訳問題、用言の活用問題で構成されている。問題はPPT一枚に入るようにし画面を共有した。学習者は全員カメラをオンにし、表裏に何も書いていない紙を用意してもらい、手書きで答案を書いて、その写真ファイルをLMSに提出させた。提出までの制限時間はテストが終了後3分間とし、制限時間が過ぎると提出できないように設定した。その際、学習者の通信環境が成績に不利益にならないよう、学習者の通信環境について確認した上でこのような方法でテストを実施したことで、テストの方法や提出についてのトラブルはなかった。テストの終了後、すぐ答え合わせと問題解説をし、採点後は点数を公開した。

次に、会話テストの場合は、テスト当日Zoomのブレイクアウト機能でペアを決め、本文を覚えて発表させた。しかし、本当に覚えているのかは教師から確認できないので、評価基準を発音と流暢性とし、制限時間を1分～1分40秒とした。制限時間を守って流暢に発音するためには、繰り返して読む練習をする必

要があり、練習なしで本を見て読めることが評価にプラスとして反映されることはなかった。

5.3 不正行為を防ぐために

まず、不正行為をする余裕がない状況を作るため、制限時間をできるだけ短く設定し、問題のレベルの調節と問題数を増やした。また、韓国語に訳す問題に関しては「授業中習っていない文法を使った答えは不正解とする」注意事項を設けた。答案の中には翻訳機を使ったと思われる答えがいくつはあったが、その学習者はテストの問題を最後まで解けなかったので良い点数を取ることはできなかった。不正行為を100%防いだとは言えないが、不正行為をする余裕がない、不正をしても無駄ということを認識させることによって緊張感を持たせ、ある程度の心理的な効果はあったのではないかと考えている。

6. アンケートの結果

6.1 アンケートの設問

2020年度「韓国語1A・1B」、「韓国語2A・2B」において4回のアンケート（春学期3回、秋学期は学校で実施した授業評価）を行った。

1回目のアンケートは、毎年初回の授業で行っている【学習者アンケート】で、学習者の基本情報を収集することを目的としているため、オンライン授業に関する設問は設けていないが、自由記述欄にあったオンライン授業に関する回答のみを取り上げる。対面授業時は、毎回アクションペーパーを提出させたが、オンライン授業では学習者の負担を考慮し、回数を減らした。2回と3回目は毎回提出させたアクションペーパーの代わりに行ったアンケートで、春学期の5回目の授業後と春学期の最後に行ったものである。4回目は秋学期の最後に学校で実施した授業評価のアンケートだが、オンライン授業に関するコメントがある設問のみを資料として扱うこととする。アンケートは LMSを利用して行い、設問は全て自由記述式で、全員にオンライン授業についての感想を求める設問を設けていない。そのため、結果を数値化することは難しく、回答のなか、オンライン授業に関する回答のみを考察対象とする。アンケート設問の詳細は表4を参考されたい。

表4 アンケートの設問

<p>【学習者アンケート】 (75人中74人回答)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. (必須) 名前 (記入例) 日本 学 (にほん まなぶ) 2. 学科、学年、学籍番号 3. (必須) これまで韓国語=朝鮮語を勉強したことはありますか。 (学習期間、テキスト、資格など) 4. (必須) 韓国語を選択した理由、きっかけは。 5. この授業へ希望、要望など、ご自由にどうぞ
<p>【春学期5回の授業後】 (75人中71人回答)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 今までの授業でよく分らなかったこと、質問など 2. 授業の内容や進め方など良かった点 3. 授業の内容や進め方など改善してほしい点 4. 今後の授業へ希望、要望など自由にお書きください。
<p>【春学期終了後】 (75人中74人回答)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の進み方や課題など、良い点、改善してほしい点などがあればご記入ください。 2. 今までの授業でよく分らないこと、難しいことや質問など 3. 秋学期授業への希望、要望など自由に
<p>【学校で実施した授業評価】 (75人中70人回答)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10 オンライン授業を受講して良かった他の理由があれば、自由に書いてください。 1. 22 この授業に対する希望や感想など、授業をより良いものにするための意見などについて、自由に記述してください。

6.2 アンケートの結果

初回の【学習者アンケート】では、オンライン授業に関して「パソコン操作に慣れておらず不安ですが、授業は楽しみです」「Zoomなどテレビ電話系は苦手なのですが頑張ります」「オンライン授業は心配ですがついていけるように頑張りたいです」の回答があり、初めてのオンライン授業を心配する様子もうかがえる。オンライン授業に関するすべての回答のなか、重複してみられる意見を課題、テスト、授業全般にまとめ(表5参照)、オンライン授業の課題と可能性について考える。

6.2.1 課題

読み書きなど、課題全般について理解が深まったという意見があった。特に録音課題と課題の個別指導について肯定的な意見が多かった。録音課題は、オンライン授業で初めてトライした課題だが、発音指導としては効果的だったと思われる。対面授業における発音指導は、通信環境に邪魔されずに発音が聞け、発音をするときの口の形を生で見られる点においては良いかもしれないが、大きい教室ではよく見えない場合もあり、また授業中に全員の発音を一人一人丁寧に指導することは不可能に近いものでもある。しかし、オンライン授業では口の形だけを大きくして見ることもできれば、録音課題をオンラインで提出することで発音を細かく指導することができた。受講生も常に発音を意識しながら単語を覚えており、今までより発音についての質問なども多かった。

その一方で、課題が多いという意見がいくつかあった。学習者の中には仕方がないと理解はしながらも厳しい意見もある。課題の多さは韓国語だけでなくオンライン授業全般において言われており、教師の立場からすれば学習度評価に公平性を保ったテストを行うことが難しいことから、課題に頼る学習度評価方法は仕方ない面もある。秋学期にはこの状況を学習者と共有した上で、課題を減す代わりにテストを増やすなどの対応をした。

6.2.2 テスト

テストに関しては、オンライン授業でテストを行うことにより緊張感があり、モチベーションが上がるという意見があった。テストをもっと行ってほしいという意見があったことから、課題に偏った授業運営はやはり十分でないと思われるが、そのためには不正行為を監督できる環境や不正行為をする必要がないテスト方法、もしくは、テスト以外に学習度を測ることができる活動などの方法を考案する必要がある。

また、テスト提出の時間制限や問題と問題の間の時間についてももっと時間がほしいという意見があったが、時間を短く設定しているのは不正行為を防ぐための一つの方法でもあったので、学習者からのこのような意見は、時間制限がしっかり役割を果たしたことになる。しかし、時間制限がテストの結果に悪影響を及ぼすことがないように、今後さらに検討していきたい。

6.2.3 授業全般

授業全般について良かった点は、まず毎回一人一人指名して質問したことが挙げられた。対面授業でも質問はしているが、隣の人に助けられたり、人の前だから緊張して答えができなかったりすることもある。しかし、オンライン授業では人を気にする必要がなく、自ら答えを言わなければならない点においてはオンライン授業ならではの緊張感があって集中できたと思われる。

次に多かったのは、Zoomのブレイクアウト機能を利用したグループセッションだが、ランダムでペアを変えながら会話の練習や会話テストの練習及び発表をする際利用した。対面授業では席替えをしない限り、練習相手が固定されてしまう傾向があるが、ブレイクアウト機能は、二人だけの空間で色んな人を相手に練習できるので、対面授業と同等、もしくはそれ以上の質で練習ができたと思われる。実際「対面授業と変わらない質で勉強できた」、さらに「オンライン授業で友だちもできた」という声もあり、オンライン授業において最も効率が高かった機能だと思われる。今後もグループワークなどに積極的に活用していきたい。

その他、授業が終わってから質問できる時間を設けたことや、やむを得ない理由がない限り、カメラをオンにして参加する「顔出し」授業方式も予想外に良かった点として挙げられた。全員がカメラをオンにして授業に参加するとパソコンが重くなり画面や音声途切れる場合もたまにあったが、大きい問題はなくスムーズに進めることができた。「顔出し」の授業を基本方針としたのは、コミュニケーションをするための授業であり、正しい発音の仕方を身に付けるため、さらに大学に入学したばかりの学習者が画面と向き合い一人で勉強するより、クラスメイトとコミュニケーションを取りながら、好きなことを好きな友だちと学べる環境を作りたいからでもある。しかし「顔出し」授業は春学期のみで、秋学期からは学校からのオンライン授業指針を受け、カメラオン・オフを自由にした。その結果、ほとんどの学習者がカメラをオフにし、結局全員オフとなった。担当する3クラスで、1クラスのみ全員カメラをオンにして参加していたが、全員女性で互いに仲も良く、クラスの雰囲気もよかったことが一つの背景になったと思われる。教師としても暗い画面に向かって一人で叫ぶようなことをしなくても良かったので、心理的にも助けられた。カメラをオフにしたクラスでは、最初のうちは本当に話を聞いているのか授業に参加しているのが気になって、生徒の名前を呼んで確認したりもしたが、思ったより真面目に授業に参加してくれたので学習者との信頼関係を保つことの重要性を改めて感じたのである。

一方、改善してほしい点として「雑音」と「タイムラグ」による音声や映像の乱れなどが挙げられた。これは【春学期5回目の授業後】に行ったアンケートでのみ取り上げられており、雑音についてはその後改善されている。タイムラグについては全く問題がない時もあったが、互いに意識し合わせて対応していくしかなかった点でもある。また、発音の音声ファイルや欠席した時のために授業動画を残してほしいという意見もあったが、大学の韓国語研究所の方針に従い、授業動画の提供はしなかった。しかし授業の動画はともかく、発音の録音もしくは口の形の映像を残すことは今後の授業にも活用できると思うので前向きに考えていきたい。

その他、【春学期終了後】のアンケートで設けた秋学期への要望の欄には、「オンラインで行われるとしても、春学期のような双方向の授業であれば十分に授業が受けられるので、大丈夫だと思った」という意見もあるものの「出来れば対面授業で皆さんに会いたい」という意見が多くみられた。

表5 アンケート結果（主な意見）

	良かった点	改善してほしい点
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧な個別指導、添削 ・毎回の録音課題は発音とイントネーションの再確認となった ・書きと読みを両方復習できる ・課題の範囲などがわかりやすく記載されていて課題に取り組みやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題のファイルを1つだし損ねてしまった時ように、再提出可能にしてほしい ・課題量が多くなることに関して、多少は仕方ない部分もあるが、大変だ。課題の量を調節してほしい
テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・書き取りテストが良かった ・テストを行うことで緊張感があって勉強のモチベーションが上がる 	<ul style="list-style-type: none"> ・小テストの提出において、提出場所が現れるまでに自分の携帯ではタイムラグがあったので制限時間をもう少し設けてほしい ・問題と問題のあいだにもう少し間を置いてほしい
授業全般	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回生徒に質問してくれるところ ・一人一人指名していくので緊張感があって集中も高まった ・オンライン授業でもみんなの顔を見ながら学習できるので、楽しい ・会話のテストの練習や発表がグループセッションだったのでやりやすかった ・オンラインで友達もできなかったの二人ペアとかで会話の練習をしたりすることは思っていたより楽しかったので良かった ・先生の正しい発音聞いてその場で練習できるので、対面授業とあまり変わらない質で勉強できてとても良い 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の発音や授業動画を残してほしい ・全員で発音するときミュートにするべきか毎回迷ってしまうので、一律で決めてもらいたい ・雑音で先生以外の方が大きく映ったり、先生の声が聞こえない ・音声や映像にラグがあるので、回答を尋ねたときにもう少し待ってもらいたい ・単語の練習で先生と私たちが交互に発音していくときに、ラグで声が重なって先生の発音が聞こえないときがあるので、も

	<ul style="list-style-type: none"> ・授業後には質問できる時間を設けて質問しやすく、周りの目を気にすることなくできてよかった ・Zoomを使って、顔出し授業でもあったため、程よい緊張感の中学ぶことが出来た点 	<p>う少しゆっくり次の単語に進んでほしい</p>
<p>秋学期への要望</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインで行われるとしても、春学期のような双方向の授業であれば十分に授業が受けられるので、大丈夫だと思った ・韓国語はオンラインでも有意義な学びができたので、オンライン継続でも大丈夫だとは思いますが、韓国語のみんなと会いたいという気持ちもある ・出来れば対面授業で皆さんに会いたい 	

6.3 アンケート結果から見えてくるもの

春学期を終えた学習者から、やはり「対面授業がしたい」という声があった。「対面授業に近い質でよかった」という意見があるにも関わらず、対面授業を希望する最も大きい理由は、通信環境により課題提出ができなくなったり、タイムラグにより学習意志がさまたげられることや、自由に話したり、笑うことも不自由な、みんなが共感できる環境ではないことであろう。これらはオンライン授業においては完璧に解決することは難しい問題である。つまり、今回のオンライン授業は、コロナ禍でのオンライン授業だったからこそ良い所があって、オンライン授業は対面授業には及ばないという話にもなる。

しかし、対面授業を授業の良し悪しの判断基準とする視点から自由になれば、韓国語教育においてオンライン授業は、学習者においても教師においても予想より肯定的な面や、新しい発見、そして今後につながる課題も見つかった。この可能性と課題はオンライン授業に限ることではない。今後の対面授業においても活かせる貴重な経験である。

まず、韓国語学習において新たな可能性として、①録音課題による発音指導、②オンライン授業においてブレイクアウト機能を使ったグループワークの活性化を挙げることができる。可能性①に関しては、発音が比較できるツールを活用することができれば、より質の高い発音指導につながると思うが、今後の課題にしたい。可能性②は、反転授業を取り入れ、オンライン上では習った表現がアウトプットできるグループワークを積極的に取り入れたい。

次に、より良いオンライン授業のために考えるべき課題としては、①負担にならない程度の課題の量、②課題や小テストにだけ頼らない学習度評価方法を工夫する、③不正行為を防ぐテストの方法を考える、④発言しやすく、質問しやすい、環境を作る、⑤オンライン授業だからこそ取り入れたい反転授業を積極的に活用する、この5つの課題を提示し、今後の課題としたい。

7. おわりに

不安と不慣れの中ではじまった初めてのオンライン授業は、対面授業にとって代えるほどまではないものの、「対面授業に近い有意義な学びができる」という、韓国語学習において新たな発見と可能性を示した貴重な経験であった。昨年度と同様2021年度も「LMS+オンライン授業（同時配信）」を行うこととなった韓国語の授業では、昨年度の授業を振り返った今回の結果を活かし、よりスムーズに授業を運営していきたい。また、対面授業に近い質の高い授業でありながら、ICTを積極的に活用した授業ができるよう、さらに工夫していきたい。

<参考文献>

- 山田祥之（2021）「オンライン授業によって課題解決型学習を実施した電気通信大学における実践報告」『電気通信大学紀要』33巻第1号、電気通信大学、pp. 1-6.
- 岩瀧大樹（2021）「オンライン授業におけるロールプレイングの導入とその検証—教職課程科目「教育相談」での実践を通じて—」『教職研究』第35号（臨時増刊）、立教大学教職課程、pp. 61-71.
- 荒井雅子・高橋龍太郎（2021）「2020年度高校3年生世界史のオンライン授業実践」『教職研究』第35号（臨時増刊）、立教大学教職課程、pp. 1-11.
- ヤン・ジョンヨン（2020）「オンラインによる第二外国語教育の可能性と課題—初級「韓国語」授業実践を例に—」『地域政策研究』第23巻第2号、高崎経済大学地域政策学会、pp. 69-89.
- 藤本かおる（2019）「日本語のグループオンライン授業での教室活動に関する研究—1事例の教案を中心に—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』NO. 20, 055-061、pp. 55-61.

著者名：朴 庚卿 (Yukyung Park)
連絡先：yukyung.park7@gmail.com

- ・受付：2021年3月22日
- ・修正：2021年3月29日
- ・掲載：2021年3月31日

コロナ禍における「遠隔型授業」の実践報告

—従来の対面型授業との比較を中心に—

仲島 淳子（近畿大学 他）

<要旨>

本実践報告は、筆者が2020年度に遠隔型授業を実施した「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」の実践報告である。2018年、2019年に実施した従来の対面型授業とコロナ禍においてオンラインで実施した2020年度の遠隔型授業を、出席率、課題提出率、小テスト、単位取得率について比較を行った結果、出席率、課題提出率、単位取得率が遠隔型授業で高い結果となった。課題提出率については、対面型授業より遠隔型授業の方が課題提出回数をはるかに多いにも関わらず、大幅に遠隔型授業が上回った。欠席により授業内容がわからなくなり、課題提出ができず、その後の授業についていけないため欠席を繰り返すという悪いループにより、出席率と課題提出率、単位取得率は通常比例する。2020年度は、通学がないことで出席率が高かった上に、欠席者に対し授業を録画した動画を当日中に配信したこと、学習者との連絡ツールを充実させたことで、悪いループの発生を防ぎ、このような結果となった。なお、小テストは、対面型授業と遠隔型授業で大きな差はなかった。学習者が大学での韓国語学習を継続していく上で、出席率がポイントであり、学習者が欠席しない環境づくり、悪いループを発生させない対策が重要である。

キーワード 遠隔型授業、対面型授業、出席率、悪いループ

1. はじめに

世界的な新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2020年度、大学における韓国語教育現場のほとんどで、急遽従来の対面型授業から遠隔型授業へのシフトが求められることとなった。筆者が担当する授業もすべて遠隔型授業が決定し、それに伴いシラバス、教材、課題など遠隔型授業に対応したものの変更が余儀なくされた。

本稿は、そのような状況下で、2020 年度に筆者が担当した「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」で行った遠隔型授業の実践報告である。まず、第 2 章では「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」の概要について述べる。そして、第 3 章では従来の対面型授業の構成について述べ、第 4 章では 2020 年度に実施した遠隔型授業の構成について述べる。第 5 章では、2018 年から 2020 年のデータを用い、従来の対面型授業と遠隔型授業を比較する。第 6 章は、比較結果からみた今後の韓国語教育の可能性と課題について考察したい。

2. 授業の概要

2.1 授業の構成

本授業は大阪府に位置する私立大学の経済学部・法学部・国際学部の共通教育科目の基礎科目のひとつである。経済学部・法学部では、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、ロシア語からいずれか 1 種類の外国語 4 単位が卒業に要するため、選択必修科目にあたる。授業回数は 90 分の授業を週 2 回、15 週の計 30 回を 1 学期とし、春学期に「韓国語Ⅰ」、秋学期に「韓国語Ⅱ」が開講される。それぞれの学修の到達目標は表 1 の通りである。

表 1 「韓国語Ⅰ・Ⅱ」学修の到達目標

科目	学修の到達目標
韓国語Ⅰ	<ol style="list-style-type: none"> 1. ハングルの読み書きができる。 2. 韓国語で自己紹介と挨拶ができる。 3. 韓国語の簡単な表現を用いたコミュニケーションが行える。
韓国語Ⅱ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的な韓国語表現の読み書きができる。 2. 学んだ表現を用いて韓国語でコミュニケーションが行える。

2.2 学習者について

本授業は、経済学部・法学部の学生の 1 年次に割り当てられるため、クラスの大半は 1 年生で構成されるが、国際学部 1 年生から 4 年生、経済学部・法学部の再履修生も数名履修する。例年、高校の授業や独学で韓国語を学んだ学生が数名履修するが、ほとんどの学生は韓国語の学習歴がない。

3. 対面型授業の概要

3.1 教科書と授業構成

「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」とともに、教科書は『改訂版ことばの架け橋』¹を使用した。本教科書は3つのユニットで構成され、ユニット1は発音と文字、ユニット2はもっとも基本的な表現の習得、ユニット3は残りの基本的な表現の習得を目的にしており、「韓国語Ⅰ」は第1課から第10課、「韓国語Ⅱ」は第11課から第21課を学習する。授業は、以下の流れで実施した。

- ①事前学習：新しい課に入る前に新出単語のワークシート（韓国語の単語が一覧となっており、日本語の意味と韓国語で数回書く練習を行う仕様）を配布し、Quizlet²を活用した学習を指示する。ワークシートは受講時に参照し、該当課終了後 Quizlet のマッチ³を実施したスコアを記入、提出するように指示をする。
- ②授業（導入）：その日の学習目標を提示し、PowerPoint を用いて新しい文法2～3個の解説と、全体で活用練習を行う。
- ③授業（練習）：教科書の練習問題や配布プリントを使用し、文法の活用練習を行う。その際、机間巡視で進捗状況をフォローし、早く終了した学生には、別途問題を提示する。解答は、学生を指名し、黒板に記入してもらい全体で確認していく。すべての文法学習を終えると、本文の意味を確認し、発音練習後、ペアで会話練習を行う。その際、机間巡視を実施し、発音などの指導を行う。
- ④事後学習：教科書の表現練習問題を自宅学習し、次回解答する。また、1課を終えるごとに、教科書の作文練習問題（6～8問）を実施し提出を指示する。
- ⑤フィードバック：提出された単語ワークシートと作文練習問題の内容をチェックし返却する。

2018年、2019年度は、上記の流れで対面型授業を実施した。ただし、ユニット1の学習時は、①で Quizlet は実施せず、ワークシートの実施と提出のみ行った。また、学習者への連絡は、大学のポータルサイトでの掲示とメールを使用した。メールについては、筆者のアドレスは公開しておらず学習者は筆者からのメールに返信する形のみであった。

¹ 生越直樹・曹喜澈著、白帝社、2013

² 2005年、アンドリュー・サザーランドによって作られたオンライン学習ツール (<https://quizlet.com/ja>)。

³ オンライン学習ツール Quizlet のゲームの一つで、用語と定義を出来るだけ早く一致させ、学習者間で時間を競うゲームである。

4. 遠隔型授業の概要

4.1 教科書と授業構成

「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」とともに、教科書は『ハングル ハングルⅠ』⁴を使用した。本教科書は文字と発音編 8 課、文法編 17 課の合計 25 課で構成され、「韓国語Ⅰ」は第 1 課から第 16 課、「韓国語Ⅱ」は第 17 課から第 25 課を学習する。授業はビデオ会議システム Zoom⁵を使用した双方向性授業を行い、課題は Microsoft Teams⁶（以下「Teams」という）を使用して提出、フィードバックを行った。授業は、以下の流れで実施した。

- ①事前学習：新しい課に入る前に、新出単語のワークシート（韓国語の単語が一覧となっており、日本語の意味と韓国語で数回書く練習を行う仕様）を PDF で配布し Quizlet を活用した学習を指示する。該当課終了時まで、「韓国語Ⅰ」では Teams に出題された該当課の単語問題を実施、「韓国語Ⅱ」は Quizlet のテスト⁷を行った結果を Teams に提出するように指示をする。
- ②授業（アイスブレイク）：Quizlet の live 機能⁸を使って該当課の単語ゲームを行う。（個人戦、グループ戦）
- ③授業（導入）：その日の学習目標を提示し、PowerPoint を用いて新しい文法 2～3 個の解説と、全体で活用練習を行う。
- ④授業（練習）：教科書の練習問題 A を使用し、文法の活用練習を行う。早く終了した学生には、練習問題 B を実施し、その内容をチャットにて送付するよう指示、フィードバックする。解答は、学生を指名し、Zoom のホワイトボードに記入してもらい全体で確認していく。すべての文法学習を終えると、本文の意味を確認し、発音練習後、Zoom のブレイクアウトルーム機能⁹を用いてペアを決め、会話練習を 10 分間行う。その際、各ルームを巡回し、発音などの指導を行う。
- ⑤事後学習：Teams にアップされた授業課題（授業で学んだ文法に関連した活用問題や作文問題 10 問）を自宅学習し、期日までに送信する。
- ⑥フィードバック：Teams 上に提出された授業課題と単語テストの結果をチェックし、個別にコメントを入れ返却する。

⁴ 高木丈也・金泰仁著、朝日出版社、2020

⁵ Zoom Video Communications, Inc. のビデオ・web 会議アプリケーション。

⁶ マイクロソフト社 Microsoft365 のコミュニケーションツール。

⁷ オンライン学習ツール Quizlet の学習モードの一つである。

⁸ 共同学習ゲーム

⁹ 参加者を少人数のグループに分けてミーティングを行える機能

2020年度は、上記の流れで遠隔型授業を実施した。ただし、文字と発音編の学習時は、①でQuizletは実施せず、PDFで配布したワークシートの実施と提出のみ行った。また、学習者への連絡は、大学のポータルサイトでの掲示、メール、Teamsのチャット機能を使用した。メールについては、筆者のアドレスをシラバスに公開していた。

5. 対面型授業と遠隔型授業の比較

本章では、対面型授業と遠隔型授業を実施した「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」について、出席率、課題提出率、小テスト、単位取得率について比較を行う。

5.1 履修者の構成と対象学習者

2018年から2020年度に筆者が担当した「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」を履修した学生は表2の通りである。

表2 「韓国語Ⅰ・Ⅱ」履修者数 (人)

		2018			2019			2020		
		①	②	計	①	②	計	①	②	計
韓国語Ⅰ	1年生	11	21	32	27	30	57	16	23	39
	2年生	6	6	12	3	5	8	3		3
	3年生	2	2	4	3	1	4	2		2
	4年生			0			0	4	2	6
	全体	19	29	48	33	36	69	25	25	50
韓国語Ⅱ	1年生	10	9	19	22	28	50	15	16	31
	2年生	3	8	11	2	1	3	2		2
	3年生	1	1	2	3		3	2		2
	4年生	1		1			0	2	2	4
	全体	15	18	33	27	29	56	21	18	39

「韓国語Ⅰ」は、2018年、2019年3クラス、2020年4クラスが学校全体で開講され、筆者は2018年から2020年まで2クラスを担当した。「韓国語Ⅱ」は、2018年、2019年は3クラス、2020年4クラス学校全体で開講され、筆者は2クラスを担当した。

今回の比較は、筆者が1年間を通して「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」を指導した1年生を対象とした。理由は、2年生以上の再履修生はどちらかひとつの科目を履

修することが多いためである。さらに、年により再履修生数が異なり、全体的に出席率が低い再履修生のデータを含めることで、比較結果が正しく表れないためである。また、筆者が非常勤講師として勤務するこちらの大学では、基本的に「韓国語Ⅰ」と「韓国語Ⅱ」は同じ教師が担当することとなっているが、2020年に担当した1クラスのみ、学部の間割編成の都合で担当が変わったため、2020年は筆者が「韓国語Ⅰ」と「韓国語Ⅱ」を1年間通して指導した表2の②1クラスのみを対象とした。対象学習者の内訳は表3の通りである。

表3 対象学習者数 (人)

	2018	2019	2020
韓国語Ⅰ	32	57	23
韓国語Ⅱ	19	50	16

5.2 出席率

表4は「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」の出席率を表したものであり、このデータの出席には、30分以内の遅刻も含まれる。

表4 「韓国語Ⅰ・Ⅱ」出席率 (%)

	2018	2019	2020
韓国語Ⅰ	81.1	84.9	95.4
韓国語Ⅱ	79.4	83.5	88.5

2018年から2019年までの対面型授業に比べ、2020年の遠隔型授業で出席率が高いことがわかる。大阪府に位置するこちらの大学は、最寄りの駅からキャンパスまで、スクールバスに乗る必要があり、またその本数も限られていることから、交通の便が良いとは言えない。そして、語学授業は午前中に実施されるため、例年授業回数の半分を超えるころから徐々に欠席や遅刻が増加していた。しかし、遠隔型授業では通学がないため、出席率の向上につながったと考えられる。また、一度欠席すると例年であれば、欠席→欠席回の授業内容がわからない→課題提出ができない→その後の授業についていけない→欠席という悪いループが発生していたが、遠隔型授業では通信環境が原因で授業に参加できない場合や、体調不良などが理由で欠席した学習者に対し、授業を録画したものを当日中に配信していたため、学習者は欠席してしまっても動画を見て学習が可能であったことで、悪いループの発生を抑えることができたと考えられる。しかし、2021年度はすでに対面型授業が決定しているため、出席率の向上

に向けた対策が必要である。具体的には、対面型授業でも Teams を活用し、授業で使用した PowerPoint をファイル共有し、さらに課題をするよう促す。また、Teams のチャットによる質問の場を設け、授業についていけない学習者のフォローに努めるなどである。

5.3 課題提出率

表 5 は「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」で実施した課題の提出率を表したものであり、このデータには遅延提出も含まれる。また、提出物の間違い数などに関係なく提出、未提出をカウントした。課題は第 3 章及び第 4 章で述べた通り、事前学習と事後学習を実施したが、「韓国語Ⅱ」において対面型授業と遠隔型授業で事前学習内容の違いがあったため、事後学習の提出課題のみを対象とした。

表 5 「韓国語Ⅰ・Ⅱ」課題提出率 (%)

	2018	2019	2020
韓国語Ⅰ	60.8	70.2	88.7
韓国語Ⅱ	66.7	56.9	92.3

まず、対面型授業の比較対象課題内容は、教科書の作文練習問題（6～8 問）を記入したワークシートを配布し、自宅で学習、次回の授業で提出する形で実施した。実施回数は、「韓国語Ⅰ」が 6 回、「韓国語Ⅱ」が 9 回であった。事前学習を含めて毎授業で課題を課していたが、提出を求める課題は、事前学習の新出単語ワークシートと事後学習の作文練習問題があり、前者の提出期限は該当課終了まで、後者は配布後の次回授業までとしていた。期限後、未提出の学習者には授業中に口頭で提出を促した。

一方、遠隔型授業の比較対象課題内容は、授業で学ぶ文法を用いた活用練習や作文練習問題を事前に Microsoft Forms¹⁰（以下「Forms」という）で作成し、Teams にアップした。学習者は授業終了後 Teams にアップされた授業課題を期日までに実施し送信する。実施回数は「韓国語Ⅰ」が 13 回、「韓国語Ⅱ」が 22 回であった。事前学習を含めて毎授業で課題を課していたが、提出を求める課題は、事前学習の新出単語テスト結果と事後学習の Teams にアップされる Forms の課題があり、前者の提出期限は該当課終了まで、後者はすべて 1 週間と指定していた。Teams の課題機能では、自身に割り当てられた課題を一覧で表示することができ、未提出の課題がある場合、期限を経過しているという警告が赤色で表示される。さらに、期限後、未提出の学習者には授業中に口頭で提出を促

¹⁰ マイクロソフト社 Microsoft 365 のアンケート作成ツール

した。

対面型授業より遠隔型授業の方で課題提出回数が多いにも関わらず、表 5 で見られるように課題提出率は大幅に遠隔型授業が上回っていた。これは、授業ごとに 1 週間以内の提出を求められる課題が与えられることにより、課題遂行の習慣化が行われたと考えられる。また、課題をするために Teams の操作をすると、未提出の課題を含め自身に割り当てられたすべての課題が表示され、未提出の存在を知らせてくれるため、教師側が全体に向かって注意するよりも、提出を促す効果があったと考えられる。つまり、全体に向かって未提出課題について口頭で警告した場合、個人差はあるであろうが、比較的強く捉えない学習者が多いが、個人画面に警告が表示されると強く捉え、促し作用が働くことにつながったのであろう。このことから、今後の対面型授業でも、従来の課題形式ではなく遠隔型授業と同様に Teams で学生自身が課題管理をする Forms によるものへ変更することが望ましいと考える。

また、遠隔型授業では通信環境が原因で授業に参加できない場合や、体調不良などが理由で欠席した学習者に対し、授業を録画したものを当日中に配信していた。そのため、学習者は欠席してしまった回の課題であっても、動画を見て学習し、期限内に課題を提出することができたことも課題提出率に影響していると思われる。今後の対面型授業ですべての授業の録画は難しいが、授業で使用した PowerPoint を Teams で共有し、質問をチャットで受け付けるといった対応は可能である。こうしたことで、欠席→欠席回の授業内容がわからない→課題提出ができない→その後の授業についていけない→欠席という悪いループを多少解消できると考える。

竹内 (2010, p. 199) は、12 才以降に学習を始め、日本の外に出ることなく高いレベルの外国語能力を身につけた学習成功者の方略をもとに、日本人成人学習者の外国語学習を成功に導く可能性を持った方略について触れている。そこで、学習の段取り、時間の調整に関するメタ認知方略として学習段階のどの段階においても、対象言語を定期的に学習することを述べている。遠隔型授業で毎時間実施した課題が、小テストや成績へ及ぼす影響については、今回検証することができなかったが、引き続き対面型授業でも Teams 活用し、毎時間課題を実施することで、どのような効果があるのか今後検証していきたい。

5.4 小テスト

表 6 は「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」で実施した小テストの平均点と回数を表したものである。実施回により、10 点満点、30 点満点、50 点満点があったが、すべて 100 点満点に換算し平均点を算出した。

表6 「韓国語Ⅰ・Ⅱ」小テスト平均点 (点/回)

	2018	2019	2020
韓国語Ⅰ	69.06/3	75.61/3	81.15/3
韓国語Ⅱ	67.95/3	69.73/3	69.78/3

対面型授業の小テストは、2課～3課終了後、教科書の練習問題から抜粋した10～15問で作成した問題用紙を30分ほどで解く形式で実施した。その際、教科書やノート類の参照は不可とした。

一方、遠隔型授業「韓国語Ⅰ」の小テストは文字編で1回、文法編で2回、合計3回、「韓国語Ⅱ」の小テストは文法編4課終了ごとに合計3回実施した。オンラインで実施のため、教科書やノート類の参照を制限できないため、学んだ文法の活用問題や作文問題をFormsで新たに25問作成し、60分間で解く形式で実施した。

小テストについては、対面型授業と遠隔型授業で大きな差は確認できなかった。特に、本格的な文法学習以降の「韓国語Ⅱ」では、平均点にほとんどの差がなかった。ただ、対面型授業の小テストは、教科書で一度解答まで終わっている問題であり、予め問題となる対象がわかっているのに対し、遠隔型授業の小テストは範囲のみ指定された状態で、すべて初めて接する問題であったという点で条件が異なるため、結果はあくまでも参考としたい。

5.5 単位取得率

表7は「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」での学習者の単位取得率を表したものである。

対面型授業「韓国語Ⅰ」の評価基準は、授業への積極的参加度及び課題40%、小テスト20%、期末テスト40%の合計100点、「韓国語Ⅱ」は、授業への積極的参加度及び課題30%、小テスト30%、期末テスト40%の合計100点で評価し、60点以上が単位取得とした。

遠隔型授業「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」の評価基準は、シラバス作成時に積極的な参加度・取組み15%、小テスト・理解度など30%、レポートなど授業外課題15%、定期試験40%としていたが、全授業が遠隔型授業に切り替わり、定期試験を実施しないことが決定したため、積極的な参加度・取組み15%、小テスト・理解度など40%、レポートなど授業外課題45%の合計100点に変更、通知し、60点以上が単位取得とした。

表7 「韓国語Ⅰ・Ⅱ」単位取得率 (%)

	2018	2019	2020
韓国語Ⅰ	68.8	84.2	100.0
韓国語Ⅱ	84.2	88.0	93.8

対面型授業では、小テストと期末テストのウエイトが 60～70%に対し、遠隔型授業では小テストが 40%、一方、授業への積極的参加度及び課題は対面型授業で 30～40%に対し、遠隔型授業で 60%と評価基準が異なるという前提ではあるが、遠隔型授業で非常に高い単位取得率となった。「韓国語Ⅰ」は全員、「韓国語Ⅱ」では授業に 3 回しか出席しなかった学習者 1 名を除き全員が合格であった。選択必修科目にも関わらず、対面型授業では例年 10%以上の学習者が単位を取得できなかったが、そのほとんどは出席率が低い学習者であった。5.2、5.3 でも言及した通り、欠席による悪いループが発生し、テスト成績の不振や不合格という結果となったのである。しかし、遠隔型授業では出席率が高い上に、欠席者には授業を録画したものをその日のうちに配信したことで、授業内容が全く分からずついていけなくなる学習者を抑えることができ、課題提出にも影響がなかった。小テストでも極端に低い点数の学習者はなかった。これらのことから、出席率は単位取得率にも大きな関係を与えていると言えるであろう。

5. 終わりに

本稿では、2018 年から 2020 年度に筆者が担当した「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」の対面型授業と遠隔型授業について、出席率、課題提出率、小テスト、単位取得率について比較した。第 4 章で述べたとおり、学習者が大学での韓国語学習を継続していく上で、出席率が重要なポイントであることがわかった。そのため、学習者が欠席しない環境づくり、また、何らかの理由で欠席してしまっても、悪いループを発生させない対策が必要である。和田（2002）は、社会人の朝鮮語学習者を例にとり、目標言語の使用環境にない学習者が、効果的に学習を進めていくための学習活動において、学習者、担当教師、学習活動の三つの観点に注目し、その結果を以下のようにまとめている。①学習者が自分自身の言語学習について考えること。また担当教師が学習者の学習に関する個人的な要因や学習ストラテジー等について知ること。②学習過程において、学習者と担当教師が共に学習について考え、目標言語の理解・記憶・運用のための学習方法を工夫すること。③学習者同士あるいは学習者と担当教師の相互の働きかけによって、協力しながら、学習活動を進めていくことということである。大学の立地条件や時間割を変更することはできないが、③の学習者同士が協力しながら、学習活動を進めていけるような環境を提供することは、欠席の抑制につながる可能性がある。全く知らない学習者同士ができるだけ早く馴染めるよう、早い段階でペアワークやグループワークを積極的に取り入れていくのもひとつの方法である。そして、教師が学習者の学習方法を工夫するという面では、授業資料の共有やチャット機能を利用した質問しやすい環境づくりが効果的で

ある。通常大学では学期の終了時に学生による授業評価アンケートが実施される。2020年度に実施された授業評価アンケートの自由記述欄では、筆者が2020年度担当したほとんどのクラスで「Zoom だからとても質問しやすかった」「わからないところを気軽に聞けた」「わからないところがあれば授業終わりに質問などでもできるのでとても学びやすい」という意見が出ていた。対面型授業に戻っても、学習者が気軽に質問できる環境を提供することが必要であると考えられる。また、アンケート回答の中に「一人一人のレベルに沿った指導をしてくださるので誰も置いていかれる感じが無かった様に感じたので受けていて気分が悪くなることはありませんでした」という回答があり、非常に印象的であった。八島（2004、p. 77）は、「学習を学習者が環境との相互作用の中で意味を見出していく過程と考えると、環境としての教師、教材、クラスメートなどとの関係の中で学習者が動機づけられていくダイナミックなプロセスを描き出すことが必要である。」と述べている。アンケートにある置いていかれる学習者が本人なのか、クラスの仲間なのかは判断できないが、学習者が学習の意味を見出していく過程において、教師もクラスメートも環境であり、学習の動機付けを担う重要な役割なのである。

筆者にとって、遠隔型授業は初めての経験であり、新しいことを試しながら、問題があれば改善、あるいは別の方法を試すの繰り返しであった。そんな遠隔型授業を行う中で、非常に多くのことを学び、発見があった。今後の授業形態として、対面型授業か遠隔型授業ということではなく、対面型授業に2020年に実施した遠隔型授業の要素を取り入れた新しい形態で進めていきたい。

また、2020年度のタイミングで教科書が変更となったので、5.3で言及した定期的な学習の効果について、対面型授業でTeamsの課題機能を活用し、学習を習慣化させることで小テストや成績にどのような影響をもたらすのか、今後検証していきたい。

<参考文献>

- 竹内理（2010）『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究—』松
柏社
- 八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点—』
関西大学出版部
- 和田悦子（2002）「日本における社会人の外国語学習—韓国語学習を例にして—」
『留学生センター紀要』5、新潟大学、pp. 61-75

著者名：仲島 淳子 (Junko Nakajima)

連絡先：nakasu0330@gmail.com

- ・受付：2021年3月22日
- ・修正：2021年3月29日
- ・掲載：2021年3月31日

コロナ禍での朝鮮史オンラインゼミ運営報告

大槻 和也（同志社大学大学院博士後期課程）

<要旨>

本稿は、筆者が携わった朝鮮史オンライン自主ゼミの運営報告である。コロナ禍で対面による研究報告が難しくなっている状況の中で、オンラインを駆使したゼミ運営の経験を共有することが目的である。

オンラインゼミは、日程調整や情報共有のためのメーリングリストやクラウドを通じたドライブの作成、そして Zoom などオンラインミーティングサービスの設定など、最低限のインフラ構築の事前準備をすれば運営が可能であることが明らかになった。

オンラインゼミにおいては、参加者の場所性を超越した参加の簡便さ、資料共有が容易に行える点、工夫次第で個別の面談も可能な点、参加者の意向を尊重した運営の自主性と柔軟性の確保などの意義を見出した。一方でオンラインゼミでは対面時よりも疲労が大きい点、Wi-Fi環境に起因する通信トラブル、懇親会を含む参加者同士の交流の難しさなどが課題として浮かび上がった。

キーワード オンライン、ゼミ、場所性、研究者交流

1. はじめに

筆者は 2020 年度に、筆者が所属する大学院ゼミの朝鮮史オンライン自主ゼミ（以下、「自主ゼミ」と表記）を運営した。以下、その経験を通じたオンラインゼミの意義と限界、ひいてはオンラインによる研究報告の可能性などについて記していきたい。このような経験は多くの大学、ゼミで行われているものと想像できる。しかし必ずしもそうした経験が大学、研究者間を横断して共有されているとはいいがたい。筆者がこの度の経験を実践報告として記す所以はここにある。

オンラインで自主ゼミを運営した理由は 2 つある。1 つ目はコロナウイルス感染防止と蔓延予防の観点から対面での授業およびゼミの開講が困難になったためである。筆者が所属する同志社大学は全国の他の大学と同様に、2020 年度の春学期にはコロナ禍のため対面授業ではなくオンラインでの授業運営を余儀なくされた。2 つ目は所属ゼミの指導教員である太田修先生がサバティカルで公

式には校務から外れたためである¹。そのために、形式的には自主運営となった。

2. オンライン自主ゼミ運営の経験

2.1 オンライン自主ゼミ運営準備

2020年の3月から、オンラインでの自主ゼミに向けた準備のため、プラットフォーム作りを行った。

まず、オンラインで情報共有を行うためにはメーリングリストがあると非常に便利である。メーリングリスト上で報告順の日程調整や日程の告知、毎週の報告者による資料やレジュメの共有などができるからである。さらに研究に関係する有益な情報の共有も容易に行える。メーリングリストであれば参加者の追加も非常に簡便に行える。今回は Google のメーリングリストを作り、そこに参加予定者（院生、教員含む）を加入させていった。

次に、ゼミ生による資料の保管庫となる役割を果たすものを、自主ゼミの仲間が Google ドライブで構築してくれた。自主ゼミの中で実際にあったことだが、報告者の中には、ある程度数量の多い資料を事前共有し、それを自主ゼミで検討するという報告もありえる。その場合、メーリングリストで大量の資料を共有することは煩雑かつ困難である。事前に検討予定の資料をドライブにアップロードしておき、メーリングリスト上でその旨を告知すれば参加者が事前に、そして自主ゼミの最中に自由に資料を検討できる。

最後に、オンライン自主ゼミの会場となる Zoom でのミーティング設定を太田先生にいただいた。オンラインゼミは研究報告と質疑応答、討論の時間を合わせて最低でも毎回2~3時間は必要である。しかし、Zoomの無料アカウントでは時間制限があり、同志社大学では大学院生には有料アカウントの付与がなされていないため、教員にミーティング設定を担当していただいた²。

2.2 運営の態様

4月は体制移行に向けた準備が必要であったため、春学期の自主ゼミ開始は5月からであった。参加者一人につき2回分の報告担当が回るように日程調整を行った。

¹ 実際にはオンラインゼミの会場となる Zoom のミーティング設定や毎回の自主ゼミへの参加など、太田修先生には文字通り多大な尽力をしていただいた。ここに感謝申し上げる。

² 秋学期には西村直登氏にミーティング設定をしていただいた。ここに感謝申し上げます。

自主ゼミは基本的に月曜の午後 1 時から開始した。報告担当者は自主ゼミの前週の金曜または土曜に報告用のレジュメ、検討対象の資料などをメーリングリストあるいは Google ドライブに共有しておき、当日はそれを前提に報告を行うというスタイルにした。追加資料がある場合も含め、基本的に報告者は Zoom の画面共有機能を駆使し資料共有しつつ報告を行い、その後に質疑応答、討論を行うという形式をとった。

9月の秋学期からは大学の方針としては、少人数での運営である場合には対面でのゼミ運営も可能となった。しかし、メーリングリスト上での議論の末、オンラインの形式を継続して行うこととした。理由は、コロナウイルスの感染防止を最優先させるためである。周知のとおりメディア報道などを通じて、秋から冬にかけてはコロナウイルスへの感染可能性が上がるのが懸念されていた。自主ゼミの参加者の中には高齢の方も複数人おり、毎週対面で行うことのリスクを考慮した。また、遠方にいる参加者もあり、対面だと大学への往復過程での感染リスクもあり、かつオンラインの方が参加もしやすいためである。さらに、参加者の意向をふまえ、開始時間を 15 分前倒して行った。

3. オンラインゼミの意義と限界

3.1 オンラインゼミの意義

このようにオンライン自主ゼミの運営経験を通じて、様々な意義、利点を見出すことができた。

まず、オンラインによる参加の簡便さである。インターネット接続が可能である空間であれば基本的にどこからでも参加できるため、場所性の限界を克服できる。筆者はコロナ禍以後、他の様々なオンライン講座にも参加してきているが、従来であれば参加できなかった講座³にも参加可能になったという点で、オンライン講座の大きな意義を見出している。こうした参加の簡便さは、コロナウイルス感染の予防にも直結しており、特に感染時における重症化の危険が高い高齢の参加者にとって重要な意義があるというべきである。

次に、資料の共有が便利であり、かつ見やすい。歴史的資料の場合、文字の大きさによって資料の読みやすさが変わる。また文学や芸術に関連する研究の

³ 例えば東京都新宿区にある NPO 法人文化センターアリランが毎年行っている歴史連続講座「現代韓日・朝日関係の「棘」－日韓基本条約（1965）の歴史的・現代的考察」は、2020 年度はオンライン開催を行った

（<<http://www.arirang.or.jp/classes/1258>>、最終閲覧日 2021 年 3 月 8 日）。その結果、従来は遠方のため参加が非常に困難であった筆者も複数回参加することができた。

場合、資料の色合いなども重要なファクターとなりうる。自主ゼミの報告の中でも、ある朝鮮人詩人の書籍資料の表紙を添付したレジュメがあった。従来の対面ゼミの場合はどうしても紙に印刷するために資料が小さい。印刷代の制約のために白黒で印刷することもあるだろう。しかしオンライン上であらかじめ共有された資料であれば参加者にとって見やすい大きさにサイズを変更することが容易であり、それによって新たな発見をすることも可能である。

さらに、少し工夫をすれば個別の面談も可能な点である。自主ゼミにおいても、ゼミの時間での報告、質疑応答の後に相談・面談希望者と教員のみが Zoom 空間に残り、他の参加者が退出することで個別の相談・面談を行っていた。なお、個別面談はオンラインゼミとは別に個別のオンラインミーティングを設定することでも可能である。

最後に、これは自主ゼミの形式をとった際の強みともいえるが、運営の自主性、柔軟性があげられる。前述のとおり、自主ゼミにおいては参加者の意向をふまえ、秋学期も基本的にオンラインで行うこととした。コロナウイルス蔓延の状況に合わせ、柔軟に運営形式を選択することができる点もオンラインの強みといえるだろう。

3.2 オンラインゼミの限界

以上のように、オンラインゼミに様々な意義、利点がある一方で、オンラインゼミの限界、あるいは課題もみえてきた。

まず、これは個人によって違いがあるのかもしれないが、筆者を含む自主ゼミの参加者の多くにとって、オンラインゼミは対面よりも疲労が大きかったことである。おそらく長時間パソコンの画面を見続けることによるもの、あるいはオンライン学習への不慣れといった要因が考えられる。従来、対面では 1 回のゼミにつき報告者 2 人だったのだが、オンラインでは 1 回につき 1 人の報告が妥当だと思われる。

次に、これは他でもよく言われていることであるが、Wi-Fi 環境によるトラブルの可能性である。特に自宅の Wi-Fi の場合、通信速度如何によってカメラ機能が十分に反映されない、途中で報告者の画面がフリーズするといった事態もあった。

さらに、ゼミの合間の休憩時間などでのゼミ参加者同士の交流がややしにくいという課題がある。対面のゼミにおいては、休憩時間に議論の補足することや、史料の在処を聞くなどの交流が容易にでき、かつしていた。しかしオンラインの場合、発話者の声が全員に等しく共有されてしまうため、個人的な研究のための会話がややしにくいという課題がある。もちろん、メールや SNS で聞くなどの代替手段を講じることも可能だが、やはり対面での交流の気軽さには程遠い。

ゼミ参加者同士の交流の難しさという観点からは、懇親会がしにくいということも大きな限界の一つだろう。このことはとりわけ新入生にとって、ゼミになじむことへの障害となるだろう。オンライン懇親会という手段もなくはないが、それでも対面での懇親会に比べるとやはり見劣りがすることは否めない。報告時間での討論以外の対話空間が乏しいというのは、オンラインでの研究の今後の課題といえる。

4. おわりに

以上、筆者の経験をもとに、オンラインによる自主ゼミ運営の意義と限界について筆者なりの考えを述べた。

コロナ禍は変異型ウイルスの出現やワクチン接種の動向などの不安定要因がまだまだ多く、数年続くことが見込まれる。つまり、数年は対面と並行してオンラインで授業やゼミを行っていく可能性が十分にあるといえる。

そんな中、筆者の経験も含め、各大学、各ゼミで行われてきたであろう多様な経験や工夫の共有を通じた研究報告環境の創造と改善が求められている。筆者の実践報告がそれに寄与できれば本望である。また筆者も他の経験や工夫を摂取したいと強く願っている。

最後に、オンライン自主ゼミの運営は当然のことながら筆者のみでは不可能であった。協力してくれた自主ゼミの参加者にあらためて感謝申し上げる。

著者名：大槻 和也 (Kazuya Otsuki)

連絡先：baggi0tsuki@yahoo.co.jp

- ・受付：2021年3月10日
- ・修正：2021年3月29日
- ・掲載：2021年3月31日

비대면 수업에서의 manaba 활용 사례

최 은경 (나가사키 외국어 대학교)

<요지>

본 실전보고는 2020년 가을학기에 실시된 나가사키 외국어 대학교 한국어 회화 수업과 문법 수업을 대상으로 비대면 수업에서 활용된 manaba 메뉴와 수업 내용에 대해 기술한 것이다. 회화, 문법 수업 모두 Zoom을 통한 온라인 실시간 설명 이후 manaba를 통한 과제 제출의 방법을 공통적으로 사용하였다. 회화 수업에서는 앙케이트, 녹음 과제 제출 등의 방법을 추가로 사용하여 비대면 수업에서도 학생들의 한국어 사용 기회를 확보하고자 하였다. 또한 문법 수업의 필기 시험과 회화 수업의 인터뷰 시험을 대면과 비대면으로 비교하여 특히 비대면으로 필기 시험과 인터뷰 시험을 실시할 경우 manaba를 어떻게 활용할 수 있는지 제시하였다.

키워드 비대면 수업, 비대면 평가 방법, manaba 활용, 수정적 피드백

1. 들어가며

나가사키 외국어 대학교에서는 코로나 사태로 인해 2020년도 새학기 시작을 5월로 미루었고 개강 후 첫 2주간은 비대면 수업을 실시하였다. 나가사키 현은 일본 내 다른 지역에 비해 확진자 수가 적은 편이었고 주로 근거리 통학을 하는 학생들이 많았기 때문에 3주차 수업부터 코로나 감염 대책을 강화하여 점차 대면 수업으로 전환하였다. 그 후 가을학기까지 계속 대면 수업을 진행하였으나 나가사키 현에서도 감염자가 폭증함에 따라 12월 중순부터 모든 수업 및 평가 방법을 비대면으로 전환하였다.

2020년도에 실시된 비대면 수업은 총 6회이며 이 중 2회는 봄학기 시작 후에 실시되었다. 봄학기에 실시된 비대면 수업에서는 수업 내용을 통일하였다. 한글 자모에 대해 설명하는 내용을 전임교원이 만든 후 각 수업 진도에 맞추어 담당 교원이 manaba에 파워포인트 및 동영상 등을 게시하는 on demand 방식을 모든 수업에 동일하게 적용하였다. 3주차 수업부터는 대면 형식으로 전환되었고 기말 평가 방법 또한 대면으로 시행할 수 있게 되었다.

반면 가을학기에 실시된 4번의 비대면 수업은 12회차 수업부터 진행되었다.

따라서 각 반마다 진도가 달랐기 때문에 수업 내용이나 방식을 통일하지 않고 교사의 재량에 따라 비대면 수업을 실시하였다. 또한 기말 평가 방법도 모두 비대면이었기 때문에 각 수업마다 기말 평가 방법이 조금씩 다른 양상을 보였다.

이에 본고에서는 가을학기에 실시된 4번의 비대면 수업과 평가 방법에서 manaba가 어떻게 활용되었는지 보고하고자 한다.

2. 보고 대상 수업 관련

2.1 1학년 한국어 수업의 반 배정 및 교재

나가사키 외국어 대학교의 한국어 수업은 전공자를 위한 수업과 비전공자를 위한 수업으로 나눌 수 있다. 전공자를 위한 수업은 한국어를 전공하는 국제커뮤니케이션학과 소속 학생들을 대상으로 하는 수업을 의미한다. 비전공자를 위한 수업은 독일어, 프랑스어, 중국어 등을 전공하는 국제커뮤니케이션학과 소속 학생 또는 영어를 전공하는 현대영어학과 소속 학생들을 대상으로 하는 수업을 의미한다.

이 중 전공자를 위한 수업은 학생들의 레벨에 따라 두 반으로 나뉜다. 한국어 전공 학생들은 입학 전 소정의 테스트를 거쳐 1반과 2반으로 반 배정을 받게 된다. 입학 전 한국어를 공부한 경험이 있고 일정 수준 이상의 한국어 지식을 지닌 학생들은 1반으로 배정되며 입학 후 처음으로 한국어를 공부하는 학생들은 2반으로 배정된다. 한국어를 전공하지 않는 학생들은 전공 언어 외에 제2 또는 제3외국어로서 한국어를 선택하기 때문에 별도의 테스트는 없으나 학생의 희망에 따라 테스트를 실시할 수 있다.

1학년 학생들을 대상으로 개설된 한국어 수업은 문법, 회화, 강독, 어휘 연습이 있으며 전공 학생들은 모든 수업을 이수하여야 한다. 비전공 학생들은 이 중 원하는 과목들을 선택하여 들을 수 있으나 문법은 반드시 이수하여야 한다. 교과서는 모든 수업에서 봄학기부터 가을학기 초반까지 ‘完全! 韓国語初級 I’를 사용하였고 가을학기 중반부터는 ‘ちょっとチャレンジ! 韓国語’를 사용하였다.

2.2 수강 인원

앞에서 언급한 한국어 수업들 중 본고에서는 회화 수업과 문법 수업을 비교하고자 한다. 회화 수업은 수업 중 대화량이 가장 많은 한국어 전공 1반(이하 전공 회화 반)을 대상으로 하였고 문법 수업은 한국어 비전공 반(이하 비전공 문법 반)을 대상으로 하였다. 각 수업의 수강 인원은 다음과 같다.

표1 전공 회화 반 수강 인원

	봄학기			가을학기		
인원	21명			20명		
내역	전공	학년	인원	전공	학년	인원
	영어	1학년	1명	한국어	1학년	20명
	한국어	1학년	20명			

봄학기에는 한국어 전공 학생 20명과 영어 전공 학생 1명이 회화 수업을 이수하였다. 이 중 영어 전공 학생은 테스트 실시 후 전공 반으로 배정하였으나 수업 난이도 문제로 인해 본인의 희망에 따라 가을학기부터는 비전공 반으로 다시 배정되었다. 영어 전공 학생의 반 이동에 따라 가을학기에는 한국어 전공 학생 20명만이 수업을 이수하게 되었다.

표2 비전공 문법 반 수강 인원

	봄학기			가을학기		
인원	33명			20명		
내역	전공	학년	인원	전공	학년	인원
	영어	1학년	20명(19명)	영어	1학년	18명
		2학년	5명		프랑스어	4학년
	프랑스어	4학년	2명			
	일본어	2학년	1명			
		4학년	1명			
교환 유학생		4명				

비전공 문법 반은 다양한 전공 학생들이 모이는 관계로 수강 인원이 전공 수업보다 많은 편이다. 봄학기에는 2019년도 가을학기에 온 교환유학생 4명과 일본어를 전공하는 정규 유학생 2명을 합하여 총 6명의 유학생들이 수업에 참여하였다. 영어 전공 2학년 학생 5명과 프랑스어 전공 4학년 학생 2명은 제3외국어로 한국어를 이수하고자 하는 학생들이었다. 영어 전공 1학년 학생 중 1명이 이수를 중도 포기하여 실제 이수 인원은 32명이다.

가을학기는 새로운 교환 유학생들이 입국하지 못한 관계로 유학생 없이 일본 학생들로만 수업이 진행되었다. 영어 전공 1학년 18명과 프랑스어 전공 4학년 학생 2명을 합하여 총 20명이 이수하였으며 이수 중도 포기자는 없었다.

3. manaba 활용 사례

3.1 수업에서의 manaba 활용

회화 수업과 문법 수업에서 manaba의 메뉴가 각각 어떻게 활용되었는지 알아보면 다음과 같다.

표3 1학년 수업 방법 비교

수업 회차	1학년 전공 회화 반	1학년 비전공 문법 반
12	Zoom으로 45분간 수업 후 manaba 「レポート ¹ 」로 필기 과제 회수	Zoom으로 45분간 수업 후 manaba 「レポート」로 필기 과제 회수
13	Zoom으로 60분간 수업 후 manaba 「アンケート」로 필기 과제 회수	Zoom으로 45분간 수업 후 manaba 「レポート」로 필기 과제 회수
14	manaba 「レポート」로 녹음 과제 회수	Zoom으로 45분간 수업 후 manaba 「レポート」로 필기 과제 회수 + manaba 「小テスト」로 기말 평가 필기 시험 연습
15	manaba 「レポート」로 기말 인터뷰 시험 실시	manaba 「小テスト」로 기말 필기 시험 실시

표3을 보면 기말 평가 방법과 연동하여 과제 종류가 설정된 것을 알 수 있다. 문법 수업은 기말 평가 방법으로 필기 시험이 예정되어 있었기 때문에 별도로 녹음 등을 하지 않고 필기 과제만을 부여하였으나 회화 수업은 기말 평가 방법으로 인터뷰 시험이 예정되어 있었기 때문에 manaba 「レポート」 메뉴를 통해 필기 과제뿐만 아니라 녹음 과제도 부여하여 학생들이 인터뷰 시험을 준비할 수 있도록 하였다.

회화 수업과 문법 수업에서 공통으로 사용한 수업 방법은 수업과 과제 제출을 하나로 묶은 방식이다. 먼저 45분 동안 교과서 내용에 대해 설명하고 연습 문제 중 일부를 학생들에게 풀게 한 후 해설을 한다. 여기까지는 Zoom을 통해 실시간

¹ 이하 본고에서는 manaba의 각 메뉴 이름은 한국어로 번역하지 않고 일본어 그대로 표기한다.

으로 이루어진다. 이후 나머지 연습 문제를 학생들에게 각자 풀게 하고 그 사진을 manaba의 「レポート」 메뉴를 통해 마감 기한 안에 업로드하게 한다.

이와 같은 방식을 선택한 것에는 두 가지 이유가 있다. 첫째는 비대면 수업을 하더라도 학생들이 수업 내용을 혼자서도 소화할 수 있도록 하기 위해 스스로 학습할 수 있는 시간을 확보하기 위함이다. 둘째는 학생들의 인터넷 접속 시간을 짧게 설정하여 인터넷 환경이 불안정해질 수 있는 것을 막고 작은 화면으로 접속하는 학생들의 피로도를 줄이기 위함이다.

그림 1 manaba 「レポート」 메뉴를 이용한 필기 과제 설명 예시

12월 16일 과제(ファイル送信レポート)	
課題に関する説明	<p>本来であれば、対面授業中一緒に解くべきだった問題を、授業終了後、速やかに一人で解いていただきます。問題は以下の通りです。</p> <p>1. テキスト13p 練習2 2. テキスト14p 練習2</p> <p>以上の問題の答えを必ず手書きにし、写真を撮ったものを締め切り前にこちらのレポートメニューからアップロードしてください。 締め切りは本日の12月16日(水)15時です。 (本来の授業終了時刻にアップロード所要時間等として30分を足したもの)</p> <p>手書きをする場合は、テキストにそのまま記入しても構いません。 また、裏紙・メモ用紙・ルーズリーフなどに書いても構いません。 間違っていないので、自分が理解した通りに書いてみてください。 各自質問などがある場合は、手書きの際、追記していただくと個別に対応します。</p> <p>期末のオンライン試験に備えた課題(皆さん全員を一人ぼっちにさせないための課題)ですので、ご協力をお願い申し上げます。 問題の答えに関する質問は、締め切りまで間に合わない可能性が高いので、とりあえず自分が考えた答えで書いて下さい。</p> <p>解説は次回の授業で行います。</p>
受付開始日時	2020-12-16 13:30
受付終了日時	2020-12-16 15:00
受付終了後の提出	許可しない
ポートフォリオ / 閲覧設定	ポートフォリオに追加 / 提出者本人と教員のみ閲覧・コメント可
学生による再提出の許可	再提出を許可しない

마감 기한은 학생들이 교과서 내용을 잊어버리기 전에 과제를 수행할 수 있도록 수업 종료 시각에 업로드 소요 시간 30분을 더한 시각으로 정하였다. 상기 그림 1의 문법 수업은 12월 16일 오후 1시부터 오후 2시 30분까지 90분 동안의 수업 시간이 있다. 이 수업 중 45분을 이용하여 실시간으로 교과서 내용을 설명하고 나머지 45분 동안 학생들이 약 3-4 문제를 푸는 것이다. 마감 기한은 인터넷에 문제가 생기거나 추가 대처가 필요할 때를 대비하여 예비 시간 30분을 더하여 오후 3시로 설정하였다. 따라서 학생들은 수업 시작 후 2시간 이내에 과제를 제출해야 하는 셈이다. 사진 제출은 수업 참여도로 최종 성적에 반영한다고 학생들에게 안내하였고 학생들 모두 마감 기한 안에 제출하였다.

제출된 모든 과제에 대해 교사가 개별적으로 피드백을 제공하였는데 manaba의 「レポート」 메뉴에는 교사의 피드백이 학생의 제출 과제 아래쪽에 답글처럼 표시되기 때문에 학생이 본인의 과제와 피드백을 함께 확인할 수 있다. 또한 알림 설정을 해 두면 교사의 피드백이 올라왔을 때 학생이 메일을 받아볼 수 있어서 빠른 확인이 가능하다.

13회차 수업에서는 「アンケート」 메뉴를 통해 과제를 부여하여 음성이 아닌 문자로도 한국어를 사용하여 대화할 수 있도록 하였다.

그림 2 manaba 「アンケート」 메뉴를 이용한 간단 대화 예시

네번째 질문) 오늘 수업이 끝나면 무엇을 할 거예요? (‘-(으)려고 해요’를 사용하세요)
(入力必須)
1.4

0文字

다섯번째 질문) 코로나가 끝나고 한국에 갈 수 있게 되면 무엇을 하고 싶어요?
 (‘-(으)ㄴ 다음에’를 사용하세요)
(入力必須)
1.5

0文字

상기 그림2의 질문을 보면 답변에 사용할 수 있는 문형이 제한되어 있는 것을 알 수 있다. 이는 당일 Zoom으로 수업한 교과서 내용을 토대로 작성된 것으로 학생들이 특정 문형을 사용하도록 제한하여 수업 내용을 복습할 수 있도록 설정한 것이다.

회화 수업에서는 「レポート」 메뉴를 통해 필기 과제뿐만 아니라 녹음 과제도 부여하였다. 14회차 회화 수업에서 사용된 녹음 과제는 교과서 본문을 읽고 본문 다음에 이어질 내용을 생각하여 4줄 이상 대화를 만들고 그 대화를 녹음한 파일을 제출하는 것이었다. 학생들이 제출한 녹음 파일을 듣고 교사가 학생의 발화를 전사한 후 개별적으로 피드백을 하였다. 이는 학생들의 음성에 대해 같은 음성으로 피드백을 하지 않고 문자로 피드백을 하였다고 볼 수 있는데 이는 기존 선행 연구에서 분류하고 있는 피드백의 종류와 차이가 있다.

일반적으로 학생들의 오류를 수정하는 수정적 피드백(corrective feedback)은 구두수정 피드백(oral corrective feedback)과 서면수정 피드백(written corrective feedback)으로 나뉘어진다. 구두수정 피드백은 학생의 발화에 대해 교사 또는 타 학습자가 구두로 수정을 하는 것으로 음성 오류에 대해 음성으로


피드백을 제공하는 것이다. 반면 서면수정 피드백은 학생의 작문에 대해 교사 또는 타 학습자가 서면으로 수정하는 것으로 문자 오류에 대해 문자로 피드백을 제공하는 것이다. 다음 표4는 구두수정 피드백과 서면수정 피드백을 비교한 것이다(田中, 2015).


표 4 구두수정 피드백과 서면수정 피드백의 비교²

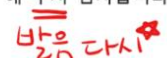
	구두수정	서면수정
피드백 제공 시기	발화 직후 (immediate)	일정 시간 경과 후 (delayed)
발화 의도 확인 가능 여부	대화 도중 확인 가능	확인 불가 문맥 등을 통해 유추 가능
명시성	리캐스트와 같이 학습자가 수정적 피드백을 인지하지 못하는 경우가 존재하므로 모두 명시적이라고 보기 어려움	기입한다는 점에서 보았을 때 모두 명시적으로 볼 수 있음 단, 밑줄 등의 표시만 하고 정답을 제시하지 않는 간접적인 방법도 사용됨

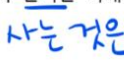
학생의 발화를 듣고 전사 후 피드백을 문자 및 기호로 기입하는 것은 상기 내용에 제시되어 있지 않다. 학생의 음성 오류를 대상으로 했기 때문에 구두수정 피드백으로도 분류할 수 있고 피드백 방법을 기준으로 서면수정 피드백으로 분류할 수도 있다. 다음 그림3의 예시를 통해 더 자세히 알아보겠다.

그림 3 학생의 발화를 전사 후 서면으로 수정한 피드백의 예시

근데 왜 생선은 굵으면 안 돼요?[☆]


환풍기가 없어서 생선 냄새가 나기 때문이에요[☆]


아, 그렇군요. 친절하게 해 주셔서 감사합니다.[☆]


아니, 괜찮아요. 그런데 아사코 씨는 혼자 살기는 기대 돼요?[☆]


² 田中(2015:110)의 내용을 한국어로 번역 후 풀어 쓴 것이다.

그림3을 보면 학생의 발화를 전사하고 오류 부분에 밑줄을 긋거나 올바른 표현 등을 기입한 것을 볼 수 있다. 이는 서면수정 피드백의 특징으로 학습자가 피드백을 시각적으로 인지하기 쉽다. 다시 말하면 학생이 피드백을 놓칠 염려가 적다는 뜻이다. 구두수정 피드백 중 리캐스트나 유도 등 암시적 특성을 지닌 피드백의 경우 교사가 오류 수정을 했음에도 불구하고 학생이 그 사실을 인지하지 못하는 경우가 보고되어 있다 (진제희, 2005; 최은경, 2020).

또한 서면수정 피드백의 경우 그 내용이 남기 때문에 학생이 언제든지 피드백 내용을 확인할 수 있다는 장점이 있다. 반면 구두수정 피드백은 오류에 대해 바로 수정을 받을 수 있다는 장점이 있지만 학생이 피드백 내용을 잊어버리면 다시 확인할 수 없다는 단점이 있다.

상기 그림3에 제시된 피드백은 앞에서 언급한 대로 시각적으로 인지하기 쉽고 그 내용이 남는다는 특성을 고려하였을 때 서면수정 피드백으로 분류할 수 있다고 하겠다. 비대면 수업의 경우 인터넷 접속 등의 문제로 인해 교사의 피드백을 학생이 놓치게 되는 경우가 발생할 수 있는데 이처럼 학생의 음성 오류에 대해 구두가 아닌 서면으로 피드백을 제공한다면 그러한 문제를 해결할 수 있을 것으로 생각된다.

3.2 기말 평가에서의 manaba 활용

비대면으로 필기 시험을 시행할 때 우려되는 점으로 학생들의 부정행위와 통신 환경에 따른 문제 발생을 들 수 있다. 학생들이 번역기를 사용하거나 교과서를 컨닝하거나 또는 학생끼리 답안을 공유하는 등의 부정행위는 사실상 막기 어렵다. 이러한 문제를 해결하기 위해 마이크와 카메라를 켜 상태로 필기 시험을 실시하는 방법을 시도할 수 있으나 통신 환경에 문제가 있는 학생의 경우 학생의 의도와 관계없이 부정행위로 처리될 수 있기 때문에 신중을 기해야 할 것이다.

표 5 비전공 문법 반 학기별 기말 평가 방법 비교

학기 구분	봄학기	가을학기
평가 방법	필기 시험	
실시 방법	대면	manaba 「小テスト」 사용
소요 시간	60분	30분 (최대 40분)
문제 유형	객관식, 주관식 모두	객관식만 출제 주관식 없음

표5는 문법 반에서 시행한 기말 평가 방법을 정리한 것이다. 비대면의 경우 기말 필기 시험을 실시하기 전에 manaba의 「小テスト」 메뉴를 사용해본 적이 없는 학생들을 위해 연습 문제를 제공하여 학생들이 본인의 시험 소요 시간 및 조작 방법 등을 사전에 체크할 수 있도록 하였다.

시험 문제는 수업 시작 정시부터 90분간 공개하였다. 소요 시간은 학생의 접속 시각을 기준으로 측정하여 본인의 타이밍에 맞추어 접속할 수 있도록 함으로써 같은 시간대에 학생들의 접속이 집중되는 것을 막았다. 인터넷 환경에 문제가 생겼을 경우 대처할 수 있는 예비 시간 10분을 포함하여 소요 시간을 최대 40분으로 설정하였다. 또한 학생들에게는 30분 내에 문제를 풀어야 하며 40분이 넘을 경우 답안을 무효로 처리한다고 공지하였다. 이처럼 소요 시간을 짧게 설정한 것은 학생들의 부정행위를 조금이나마 막기 위함이다.

학생들의 소요 시간은 로그 기록을 통해 확인할 수 있었는데 10분 내외의 짧은 시간 안에 시험을 종료한 학생들은 두 가지로 나눌 수 있었다. 첫째는 내용을 잘 숙지하고 있어서 실제로 문제를 푸는 데에 시간이 많이 소요되지 않은 학생들이었고 둘째는 내용을 잘 이해하지 못하여 시험을 포기하고 적당히 답안을 선택한 학생들이었다. 대면 시험의 경우에는 시험 시작 후 일정 시간이 지나야 퇴실 가능하기 때문에 시험을 포기하기 전에 조금 더 생각할 시간이 주어지지만 비대면 시험의 경우에는 그러한 제한 사항이 없었기 때문에 더 빨리 시험을 포기한 학생들이 있었던 것으로 생각된다. 이어서 기말 평가에서 사용된 문제들을 살펴보겠다.

그림 4 단어의 활용 형태를 묻는 문제 예시

⑥ 以下の単語を下線部に入れた時、形が違うものをも一つ選びなさい。(選択必須)

<만들다>

1.6

1. ○ ____ 거예요.
2. ○ ____ 고 싶어요.
3. ○ ____ 면
4. ○ ____ 러 가요.
5. ○ ____ 다음에

그림4는 단어의 활용 형태를 묻는 문제로 각 문형의 의미와 올바른 활용 형태를 모두 알아야 풀 수 있는 문제이다. 문형은 문장 안에서 쓰이므로 위와 같은 구의 형태보다는 문장의 형태로 출제하는 것이 적절하다고 하겠으나 비대면 수업으로 인해 시험 범위가 축소됨에 따라 시험에서 사용할 수 있는 어휘에 한계가 있었기 때문에 이와 같이 출제하였다.

그림 5 어휘, 형태 활용 등을 포괄적으로 묻는 문제 예시

- ⑩ 「試験を受ける前に、勉強しに図書館へ行きます。」という意味になるよう、以下の語彙を並べ替えなさい。(選択必須)

1.10

項目

1. 시험	2. 시험	3. 시혼	4. 시험	5. 을	6. 를	7. 보고
8. 보기	9. 본	10. 볼	11. 보아기	12. 보알	13. 보안	
14. 반	15. 보기	16. 전에	17. 후에	18. 다음에	19. 공부러	
20. 공부로	21. 공부하러	22. 공부하로	23. 공부러	24. 공부하러		
25. 공부하로	26. 도서관	27. 에	28. 가요	29. 와요	30. 요요	
31. 있어요	32. 없어요					

그림5는 문법과 어휘를 모두 알아야 풀 수 있는 문제이다. 특히 어휘 부분은 선택지에 비슷한 발음의 다양한 보기들을 준비하여 주관식에 준하는 객관식 문제를 만들고자 하였다. 이를 통해 학생들이 어휘의 철자를 잘 알고 있는지 확인하고 문제의 난이도를 조절하였다. 이와 같이 비대면 기말 평가에서는 주관식 문제를 출제하지 않고 객관식 문제만을 출제하였는데 이는 비전공 학생들이 한국어 키보드를 설정하고 입력하는 데에 어려움이 있다는 점과 스마트폰으로 접속하는 학생의 경우 자판 입력이 어려울 수 있다는 점을 고려한 것이다.

사실 기말 평가를 모두 객관식 문제로 진행하는 것에 대해 전혀 주저하지 않았던 것은 아니다. 그러나 manaba의 「小テスト」에는 선택지의 순서를 무작위로 설정할 수 있고 답안을 한 번만 작성할 수 있도록 제한할 수 있는 기능이 있었기 때문에 여러 가지 불안 요소를 최소화하여 시험을 진행할 수 있었다.

언어 수업에서 고려될 수 있는 필기 시험 외의 방법으로 인터뷰 시험을 들 수 있다. 인터뷰 시험은 실기 시험의 일종으로 실시간으로 일대일 대화를 할 경우 학생들의 부정행위 우려를 줄일 수 있다는 장점이 있다. 그러나 필기 시험과 마찬가지로 통신 환경에 문제가 있을 경우 시험 시간이 길어지거나 시험이 원활하게 진행되지 않을 수 있다. 이에 따라 회화 반 가을학기 비대면 평가에서는 일대일 인터뷰가 아닌 녹음을 통한 인터뷰 시험을 실시하였다. 다음 표6은 회화 반에서 사용된 기말 평가 방법을 정리한 것이다.

표 6 전공 회화 반 학기별 기말 평가 방법 비교

학기 구분	봄학기	가을학기
평가 방법	인터뷰 시험	
실시 방법	녹음된 질문을 듣고 교사 앞에서 구두로 답변	제시된 질문을 보고 답변을 녹음 후 제출
소요 시간	한 학생 당 20분 내외	문제 공개부터 마감 기한까지 3시간

봄학기의 경우 대면 수업이었기 때문에 일대일로 실시간 대화를 통한 인터뷰 시험이 가능하였으나 학내 코로나 대책을 준수하여 가능한 한 근거리에서 학생과 교사가 대화하지 않는 환경을 만들고자 하였다. 이에 교사는 별도로 질문하지 않고 학생만 대답하는 형식으로 인터뷰 시험을 진행하였다. 시험 문제는 시험 실시 2주 전에 공개하여 학생들이 충분히 연습할 수 있도록 하였고 시험 당일에는 사전에 공개된 문제 중 무작위로 선정된 4개의 질문이 재생되도록 하여 학생 간의 질문 내용 공유가 용이하지 않도록 하였다.

가을학기의 경우는 앞서 언급한 대로 학생들이 인터넷 환경에 녹음한 파일을 마감 기한까지 업로드하는 것으로 인터뷰 시험을 대신하였다. 단, 실시간 시행이 아니었기 때문에 봄학기과 동일하게 시험 문제를 사전에 공개하고 학생별로 문제를 무작위로 선정하는 방법을 사용할 수 없었다. 이에 따라 문제를 사전 공개하지 않고 시험 당일에 공개하여 난이도를 조절하였다. 또한 녹음 파일의 최단 시간과 최장 시간을 설정하여 학생들의 발화가 너무 짧거나 너무 길지 않도록 조정하였다.

시험 문제는 manaba의 「レポート」 메뉴를 통해 시험 시작과 동시에 공개하였다. 질문은 모두 한국어로 제시하였고 필수 질문과 선택 질문으로 나누었다. 필수 질문은 모두 3개로 교과서와 관련된 내용이었으며 선택 질문은 모두 8개로 교과서를 포함한 다양한 내용으로 학생들이 제한된 시간 내에 대답할 수 있도록 하였다.

구두 시험에서 시간을 기준으로 삼을 때에는 발화량을 늘리지 않고 발화속도를 조절하여 정해진 시간을 채우려는 학생들이 있을 수 있다는 점을 염두에 두어야 한다. 실제로 기말 평가 전 14회차 수업에서 학생들에게 제한 시간을 2시간으로 설정하고 연습 녹음을 진행하였을 때 몇몇 학생들에게서 그러한 경향이 나타났다. 이 부분에 대하여는 개별 피드백과 공지사항을 통해 적절한 발화 속도 또한 평가 대상이 되는 것을 인지시키고 기말 평가에서는 제한 시간을 3시간으로 늘려 학생들의 부담을 줄이고자 하였다.

4. 나가며

나가사키 외국어 대학교의 비대면 수업의 횟수가 많지 않아 더 다양한 수업을 대상으로 보고하지 못한 점, 한국어 전공 수업과 비전공 수업의 종류를 통일하지 못한 점 등은 본고의 한계라고 할 수 있다. 그러나 본 보고의 초점은 한국어 전공 여부에 따라 수업이 달라진다는 것이 아니라 수업에서 활용되는 manaba 메뉴 소개와 필기 시험과 실기 시험의 실시가 비대면에서 어떻게 이루어지는지를 알아보는 데에 있음을 밝혀 둔다. 다만 한국어 전공 내에서 이루어지는 회화와 문법 수업을 대상으로 하였다면 변수의 영향을 최소화하면서 좀 더 정확한 비교가 가능했을 것이라는 아쉬움은 감출 수 없다.

적은 횟수였지만 manaba를 이용하여 비대면 수업을 하면서 편리하다고 느낀 점은 학생들에게 일대일로 피드백을 주기 쉽다는 것과 학생들이 그 피드백을 확인하였는지 교사가 바로 체크할 수 있다는 점이였다. 특히 수업 내에서 학생의 오류를 수정할 때 오류에 집중하기보다 다른 학생들 앞에서 ‘지적 받았다’는 것에 더 집중하여 수정 받는 것을 꺼려 하는 학생들이 간혹 있는데 비대면 수업의 경우는 다른 학생들의 눈을 신경 쓰지 않고 수정을 주고 받을 수 있다는 점이 장점으로 작용하였다. 그러나 통신 환경에 따라 영상이 잘 보이지 않거나 교사의 음성이 끊기는 등 학생들이 받는 수업의 질이 달라질 수 있으며 학생의 접속이 원활하지 않을 경우 학생의 수업 태도를 교사가 판단하기 어렵다는 점 등은 단점으로 작용하였다.

또한 비대면 수업에서의 피드백 방법으로 학생의 구두 오류에 대한 서면 피드백 방법이 새롭게 제시되었다. 이는 구두수정 피드백과 서면수정 피드백의 장점들을 통합한 수정적 피드백 방법을 발견하는 첫걸음이라고 말할 수 있겠다. 이 부분에 관해서는 더 많은 수업을 대상으로 한 후속 연구가 필요할 것이다. 하루 빨리 코로나가 종식되어 학생들과 호흡을 같이 할 수 있는 날이 오기를 바라며 본 보고를 마친다.

<참고문헌>

- 金順玉・阪堂千津子・崔榮美 (2017) 『ちょこっとチャレンジ! 韓国語改訂版』 白水社
- 田中真理 (2015) 「ライティング研究とフィードバック」 『フィードバック研究への招待- 第二言語習得とフィードバック』 名部井敏代・森博英・田中真理・原田三千代・大関浩美 (編)、くろしお出版、pp. 107-138.

崔銀景 (2020) 『教師の訂正フィードバック使用言語による学習者の反応について
—日本語母語話者の韓国語学習を中心に—』 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士論文

松岡雄太・佐々木正徳・梁正善・沈智炫 (2015) 『完全！韓国語初級 I』 同学社

진제희 (2005) 「한국어 수업에 나타난 교사의 수정적 피드백과 학습자 반응 연구」 『이중언어학』 28, 이중언어학회, pp.371-390.

著者名 : 최 은경 (Eunkyung Choi)

連絡先 : choi@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

- 受付 : 2021 年 3 月 27 日
- 修正 : 2021 年 3 月 30 日
- 掲載 : 2021 年 3 月 31 日

ニューノーマルな韓国・朝鮮語授業に向けて

— ネット配信授業の実践 —

趙 智英（同志社大学）

<要旨>

本稿では筆者がネット配信（非対面）で行った韓国・朝鮮語授業の実践方法と今後の課題について報告する。本授業は Forms で作成した課題と専任教員が作成した教材を学生に提示する資料提示型と Teams のビデオ会議で課題のフィードバックと質疑応答、発音練習、小テストを実施する双方向型を組み合わせた。メールや Forms 回答集計機能を活用し、学生へのフィードバックを行い、期末試験はハイブリッド型で実施した。今回の実践を通じて(1)ツールを利用した横の繋がり、(2)長期的なネット配信授業のための環境構築、(3)安全性と公平性の保障などが課題としてあげられた。今後は授業や試験などを非対面で行うことを想定し、授業担当者は学内の取り組みや学生支援に関する情報を把握しツールの利便性を活かしたコミュニケーション方法を模索する必要がある。また、安全性と公正性を保障するためには授業担当者与学生との信頼関係を築き、学生の意識の向上を図ることが重要な課題となる。さらに、授業担当者が指導方法や学生との向き合い方に工夫を凝らしていく必要があり、学生のみならず授業担当者の意識の向上も今後より一層求められる。

キーワード ネット配信授業、非対面授業、韓国・朝鮮語授業、Teams

1. はじめに

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）はあらゆる分野に大きな影響を及ぼした。教育機関も例外ではなく、多くの大学が感染症対策や非対面授業を余儀なくされた。本稿では、このような状況下で筆者が韓国・朝鮮語授業を担当するにあたって資料提示型に双方向オンライン型を取り入れたネット配信授業の実践について報告し、授業実践により見えてきた課題と今後の対応策について述べる。

2. 背景

昨今の情勢の下で時たま耳にするようになったニューノーマル（新しい生活様式）は、もとは 2007 年から 2008 年にかけてのリーマンショックを含む世界的金融危機の際にビジネスや経済学の分野において使われた言葉である。福原（2021）によると、ニューノーマルは「「有事」が「平時」に取り込まれること、これまでの「当たり前」が大逆転し、新しい「当たり前」が成り立つこと」を意味する。大勢の学生が教室に集まり授業を受ける光景が当たり前だった時代から、ネット配信授業を受講する学生が、一定の距離を保ち、飛沫感染防止のため同じ方向を向いてパソコンの画面を眺める光景がニューノーマルな当たり前となったのである。

あらゆる当たり前が逆転しはじめた頃、筆者が所属する大学では、感染症拡大に係る政府の緊急事態宣言の発令や各都道府県の不要不急の外出や他地域との往来自粛要請を受け、大学キャンパスへの入構制限や図書館を含む大学各窓口閉鎖などの措置を講じ、春学期はすべての授業を非対面（ネット配信）で実施した。ネット配信授業は大きく資料提示型、動画配信型、双方向オンライン型の 3 種類に分けられた。資料提示型授業は資料と音声データが提示される授業を含む各種資料の提示により行う授業である。動画配信型授業はあらかじめ録画された授業の動画を視聴する方法（オンデマンド）を指す。双方向オンライン型授業（以下、双方向型授業）は Teams¹、Zoom²などのビデオ会議アプリケーションを使って、授業担当者と学生が同時にアクセスし、リアルタイムでコミュニケーションを取る授業である。

秋学期は、対面授業とネット配信授業の 2 形態を基本として開講された³。春学期と同様、ネット配信授業には資料提示型、動画配信型、双方向オンライン型がある。

筆者が担当した「コリア語応用 1」、「コリア語応用 3⁴」（以下、本授業）は初修外国語科目の一つで、1 単位、週 1 コマ（90 分）、半期 15 回で中級の文法項目を学習する授業である。初修外国語科目は専任教員で構成される教務委員会が定めた方針により資料提示型のネット配信授業が推薦された。会話の授

¹ Microsoft 社が推奨する Microsoft365 のコミュニケーションツール

² Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービス

³ <https://www.doshisha.ac.jp/news/2020/0806/news-detail-7767.html> 参照（最終閲覧日 2021 年 3 月 11 日）。

⁴ これらの授業では中立性を保つため英語の Korea を借用している。本稿では『日本韓国研究』特集号のテーマの表記に従い韓国・朝鮮語とする。

業や上級科目については、Web会議システムを使った双方向型授業を行う場合もあり、受講生数が教室着席時に前後左右1m以上の間隔を空けた定員に収まる場合は対面での授業が可能であった。

3. 実践方法

3.1 授業計画および使用ツール

本授業は中級の文法項目を学習し、辞書を用いて新聞の論説文のような定式的な文章から、散文で書かれた長文、短い小説などが読めるようになることを到達目標とした。各々半期 15 回の授業と期末試験で構成され、教科書は『実用韓国語 2』⁵を使用した。春学期は平常点 40%（課題 20%、小テスト 20%）、期末試験 60%の合計 100 点で評価したが、評価基準を検討しなおし、秋学期は平常点 60%（課題 20%、単語テスト 5%、小テスト 35%）、期末試験 40%の合計 100 点とした。

先述した通り、学生が教室で授業を受けることができるのは着席時に前後左右 1m以上の間隔が確保できる授業のみであるため、登録者数が 20 人を超えた本授業は教務委員会が定めた方針により一年を通じてネット配信授業を行った。具体的には、教科書の内容をもとに専任教員が音声データを挿入したパワーポイント資料（以下、教材）を作成し、授業担当者が大学が提供している独自の学修支援システム上に教材と課題を提示し、学生へのフィードバックやコミュニケーションはメールやコミュニケーションツール Microsoft Teams（以下、Teams）を利用した。課題は Microsoft Forms⁶（以下、Forms）を活用したクイズ形式で作成および提出を行った。種々のコミュニケーションツールがある中で Microsoft のツールを使用した理由は、充実した機能や使いやすさだけでなく、大学が Microsoft のソフトウェアライセンスを提供しているからである。そのため、授業担当者、学生は Teams や Forms はもちろん Outlook、Word、Excel、OneNote などの Microsoft 365 アプリケーションを無償で利用できる。特に Teams や Forms は大学から交付されたユーザ ID、パスワードで認証を行わなければアクセスできないように設定することができるため、セキュリティの観点から後述する双方向型授業や小テストにも Teams を活用した。

⁵ コリア語教材研究会（2013）『実用韓国語 2』改訂第 3 版、同志社大学生協書籍部

⁶ アンケートや投票、クイズ、テストなどの作成、共同作業が可能な Microsoft 社が推奨する Microsoft365 のアンケート作成ツール

3.2 Forms 課題とフィードバック

資料提示型の授業は学生の学習態度や内容理解、自己効力感を測定することが難しいため、授業の進度に応じて、学生の理解度を測るために初回のオリエンテーションと最終回を除く 13 回分の課題を作成しフィードバックを行った。課題として、授業の進度に沿って学習した文法、文型、新出語彙を用いた選択式と記述式のクイズを Forms で作成したものを「Forms 課題」とし、次回授業までに回答するように指示を出した。

Forms は自動的に回答集計を行う機能が搭載されている。作成者側は回答者の回答開始時間、回答終了時間、学生 ID、個人の回答率、全体の回答率を確認できる。ブラウザでは図 1 のようにグラフと数値で表示され、クイズの作成データと回答データは Excel にエクスポートすることができる。

Forms の回答データを確認し、毎週の課題の提出期限内に回答を提出しなかった学生には個別連絡をし、課題提出の評価を減点とした。最も誤答が多かった設問については、後述する双方向型授業の際に画面共有で教材を一緒に見ながら解説し、メールでの質問は常時受け付けた。

図 1 Forms 課題の回答集計画面 ※筆者一部修正

次のうち、漢字とそのハングル表記（韓国式）の組み合わせで、ハングル表記が誤っているものを選びなさい。（5 点数）

回答者の 86% (31/36) がこの質問に正解しました。

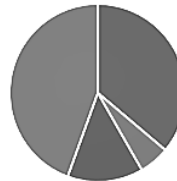
- | | |
|-----------|------|
| ● 논리 (論理) | 1 |
| ● 이후 (皮后) | 31 ✓ |
| ● 관리 (管理) | 4 |
| ● 인식 (認識) | 0 |



次のうち、引用文の縮約形の活用が間違っているものを選びなさい。（5 点数）

回答者の 36% (13/36) がこの質問に正解しました。

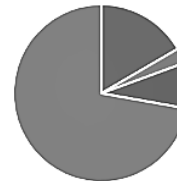
- | | |
|--------------------|------|
| ● 안 돼요 — 안 돼내요. | 13 ✓ |
| ● 비싸요 — 비싸내요. | 2 |
| ● 잊어버리다 — 잊어버리내... | 5 |
| ● 닦았어요 — 닦았내요. | 16 |



次の文章の括弧（ ）の中を活用するときに最も適切な接続表現を選びなさい。
「쓰레기를 (버리다) 갖대요。」（5 点数）

回答者の 72% (26/36) がこの質問に正解しました。

- | | |
|----------|------|
| ● -기 때문에 | 6 |
| ● -(이)나 | 1 |
| ● -게 | 3 |
| ● -(으)러 | 26 ✓ |



授業開始時のアンケート調査で、パソコンやスマートフォンのキーボードでハングルを打つことができない学生がいたため、Formsの課題は回答にハングルを書かなければならない記述式クイズは出題せず、13回目以降はForms課題に加え、それまで学習した文法を使った短い文章を韓国・朝鮮語で作文する課題を出した。手書きで書いた文章の写真を撮り、画像ファイルをメールまたは学修支援システム上に添付して提出する方法をとった。

3.3 資料提示型と双方向型授業の併用

資料提示型授業は、学生にとって受講のための大学への移動が不要で、時間や場所に制限されず、一定の期間に何度も見返すことができるという利点がある反面、お互いの顔も、声もわからないまま、ネット上に掲示された教材を確認し、課題を随行する。授業参加度を評価できない代わりに自ずと課題の量が増え、寝る間を惜しんで課題に取り組む学生も多いだろう。授業担当者にとっても、課題の回答提出状況だけで学生の理解度を確かめるのは難しく、リアルタイムでコミュニケーションを取る機会がなければ学生からのフィードバックを受ける機会は減る一方である。

そこで、教材の各課の学習が終わる毎に課題のフィードバックと質疑応答、発音練習、小テストのためにTeamsのビデオ会議で半期15回のうち8回（フィードバックと質疑応答、発音練習を兼ねて4回、小テスト4回）は双方向型授業を行った。小テストは試験問題の流出防止のために画面共有で問題を見せた。学生には回答用紙（ノートまたは紙）と筆記具を用意し、パソコンの内臓カメラやWebカメラで上半身、手元、回答用紙が見える状態で受験し、手書きの回答を画像ファイルにし期限まで提出させた。中にはパソコンとスマートフォンで同時にビデオ会議にアクセスし、カメラで自身を映しながらスマートフォンで画面共有された問題を見て回答を作成する学生も多数いた。

3.4 ハイブリッド型の期末試験

半期の授業が終了した後は、学習した内容に関して総合的に判定するために期末試験を実施した。春学期は15回の授業が終了した後に別途実施日を設けた。定められた日の一定時間、試験問題を学修支援システム上に掲示し、回答を画像ファイルにして同システムに提出させたが、不正行為やセキュリティ問題を考慮し、秋学期は15回目の授業時間に期末試験を対面で行った。

期末試験を行う際は、学生が密集しないように1m以上の距離が確保できる大教室で実施し、マスクやフェイスシールドの着用、発話を控えるなど感染症拡大リスクを低減するために徹底した。しかし、自宅から大学までの移動や教室の外での感染については防ぐ手立てがなかなか見当たらない。さらに、期末試験を実施した時期に感染拡大により京都府に緊急事態宣言が発出されたことを

受け、大学は基礎疾患や持病があったり、感染した場合に重症化するリスクの高い学生、同等の事情により感染した場合に重症化するリスクの高い同居家族がいる学生、感染リスクに鑑み出校したくない学生に対しては通学を強要せず受講・受験機会確保などの配慮を行うという方針を決めた。このような経緯から、期末試験当日まで代替課題やネット配信での受験を要請する学生からの連絡が絶えず、期末試験は対面と非対面のハイブリッド型で行うことに決め、対面試験当日に希望者に限り期末試験問題を当該学生のメールに送信し、回答の画像ファイルを期限内に提出することにした。

4. 今後の課題と対応策

今回の実践を通じていくつかの課題が浮き彫りになった。その課題とは、(1) ツールを利用した横の繋がり、(2) 長期的なネット配信授業のための環境構築、(3) 安全性と公平性の保障などである。

4.1 ツールを利用した横の繋がり

前年度まで対面で行ってきた授業を非対面で実施するにあたって、講義系、実技系など授業の内容を考慮しネット配信授業の方法や使用ツールは特に制限されなかった。ネット配信授業の開始に伴い、Microsoft だけでなく Zoom アカウントもライセンス付与の対象となり、嘱託講師を含む教職員は 300 人までのビデオ会議が時間無制限で無償利用できるようになったこともあり⁷、授業担当者によって授業に関する各種連絡、資料や課題の提示、課題やレポートの提出、動画ファイルの格納、双方向型授業の実施などには複数のツールが利用された。

授業担当者としては最低限の使用ツールだけ知っておけば良いが、ネット配信授業をいくつも受講する学生は、授業毎に異なるアプリケーションをダウンロードしたり、複数のツールを駆使して連絡事項や課題の確認をしなければならない。そのような状況から学生は授業担当者からの情報伝達を受け取るだけで精一杯で、今回、資料提示型に加え Teams での双方向型授業も行ったが、双方向とはいえチャット機能や引用返信、学生からの画面共有で質問事項を共有するといった方法はあまり活用できなかった。

対面での授業では、理解ができていのかどうか学生の様子を窺い、その場で補足したり応用問題を出して一緒に解いてみたり、学生と学生が教え合うことで「横の繋がり」ができ、互いに理解を深めることができた。非対面でも会議

⁷ 300 人以上の登録者がいる授業担当者には 300 人以上のミーティングが可能なライセンスが用意された。

チャットや掲示板などで学生からの質問や授業担当者からの補足を共有して他の学生の理解も補えることを期待したが、今回はメールで質問を受けることが多く、1対1の質疑応答を授業担当者が他の学生に共有するという一方の情報伝達になってしまった。

これからは対面、非対面を問わず様々な場面でコミュニケーションツールが活用されるであろう。次回は授業開始時に学生にどのようなツールが使いやすいかアンケート調査を行い、授業担当者からツールの機能や使い方を説明する十分な時間を設けようと考えている。ツールの利便性を活かしたコミュニケーションに適応し、活発なやり取りと学生間の繋がりを大事にしたネット配信授業を目指したい。

4.2 長期的なネット配信授業のための環境構築

2020年度は大学において様々な工夫とサポートが行われた。パソコン、タブレット、スマートフォンなどを無線でインターネットに接続するためのWi-Fiルータの貸出、学内でネット配信授業を受講する学生のための自習室の開放、ノートパソコンの貸出といった受講環境のサポートや、学習支援コンテンツの提供、オンライン学習相談⁸などの全学的な学習支援施策などである。

また、文部科学省が設けた学生支援緊急給付金の周知はもちろん、2020年度は学部学生・大学院学生を対象とした給付制の奨学金や短期貸付金制度が設けられ、学びを保障するための取り組みがなされていた。

しかし、学内の情報教室、PCコーナーでデスクトップパソコンや貸出用のノートパソコンはWebカメラやマイクが内蔵されていない。本授業ではビデオ会議で小テストを行う際、不正防止と学生間の不公平感を生まないために学生に必ずカメラをオンにするよう指示した。小テストを受験する姿が確認できない場合は無効になる旨を事前に周知したにもかかわらず、Webカメラとマイクを用意しなければならないことを知らずに大学のパソコンを使ってカメラを付けないまま小テストを受験する学生がいた場合は別日にカメラを用意して追試を受けさせた。

同じ日に対面授業とネット配信授業がある学生は、学内でネット配信授業を受講できる空き教室探しや移動に加え周辺機器も持参しなければならない。このような状況が続くと学生にとって負担になり、モチベーションの低下に繋がる恐れがある。そのため、長期的にネット配信授業に対応できる学内の学習環境や設備を整えるのはもちろん、サポートを必要とする学生に適切な案内ができるよう、授業担当者も学内の情報を把握すべきであろう。

⁸ 同志社大学 学習支援・教育開発センター (2021) 『CLF report』 32、同志社大学 学習支援・教育開発センター、p. 6.

4.3 安全性と公正性の保障

最後に、学生の安全性と公正性について考えたい。春学期に非対面で行った期末試験は学生間の試験問題の共有や不正行為の可能性があり、公正性が保たれなかったと判断され秋学期は対面で期末試験を行ったが、感染拡大により対面で期末試験を実施している間に希望者は非対面での受験を許可することになった。不正行為防止のために対面試験と同時間帯に非対面試験を行ったが、授業担当者一人で大教室で対面の試験監督をすると同時に、ノートパソコンの画面越しに非対面受験の監督をすることが難しく、やむを得ず非対面で受験する学生にはメールで試験問題を送信する方法を取った。公平性を最大限担保するために、非対面の試験問題は対面試験と同様の出題形式と試験範囲内の文法・文型項目を出題し、語彙や語句を変え、試験範囲内で短い読解や作文を追加出題したが、学生が不正な手段を用いて回答を作成する可能性は否めない。最終的な成績評価基準は、対面であれ、非対面であれ変わらない。このような不透明性は学生の不公平感を生みかねない。

非対面の試験は常に公正性、公平性を巡って議論される。特に期末試験のような学習成果を総合的に評価する試験は成績に直結するものであり、公平性を確保すべきである。しかし生活様式や意識が大きく変化した今、授業担当者は成績評価に係る課題や試験などは非対面で行うことを想定しておかなければならない。

このような状況でいかに安全性と公正性を保障するかは、学生の倫理観の向上が最も重要な課題となる。内山（2021）は自粛下での良心の働きについて論じる中で、共感性により他者のダイナミックな視点を理解することにより、受動的で画一的な他者理解から真の理解へと進み、自粛の意義の理解を深めて行動基準を内面化することにより主体的な行動制御が実現すると述べる。自身が置かれた状況での主体的な行動制御は学生の非対面による受験にも求められることである。

そこで学生の意識向上のために授業担当者ができることとして、採点基準の見直しや成績評価基準の策定があげられるほか、授業担当者と学生との信頼関係、共感性を育むことが一つの手掛かりになるのではないだろうか。学生一人一人が学習へのモチベーションや達成感を得ることで意識の向上に繋がるように、そして学習内容の振り返りと学生自身の理解度の確認という本来の試験の意義を再認識するように、授業担当者は指導方法や学生との向き合い方に工夫を凝らしていく必要がある。そのためには、学生のみならず授業担当者の意識の向上も今後より一層求められるであろう。

一方、感染拡大により大学が決めた受験機会確保などの方針について、対面で期末試験を受けた学生からは、大学がそのような配慮をしていることを知ら

なかったという声が上がった。また、学生支援のために大学が提供しているサポートを知らず利用しなかったという意見もあり、より多くの学生に学内の情報が行き届くよう周知方法を工夫する必要性を感じた。繰り返し述べるが、大学に赴き、対面で情報が得られる機会が減ったからこそ、授業担当者も学内の情報収集と学生への声掛けを怠らないよう心掛けなければならない。つまり、授業担当者と学生のコミュニケーションを図るためのツール活用は不可欠なのである。

5. 終わりに

以上、筆者がネット配信で行った韓国・朝鮮語授業について、使用ツールや資料提示型・双方向型授業の併用、期末試験の実施方法などを報告し、今後の課題と対応策について述べた。

本授業では、資料提示型と双方向型を組み合わせることにより、学生の理解度を確かめると同時に授業担当者と学生、そして学生間のコミュニケーションを試みた。実践を通して見えてきた課題として、ツールの機能を活用した双方向コミュニケーションの工夫、学内でネット配信授業を受講する学生のためのより快適な環境の構築、ネット配信授業における学生の安全性と公正性、公平性の保障などがあげられた。

特に非対面による課題や試験、成績評価を行うにあたって懸念される公正性、公平性の問題は、授業担当者、学生の信頼と共感性を育み、学生に期待すべき倫理観を向上させることで僅かに解消できるのではないかと考える。さらに、非対面でも透明な管理、監督が可能な試験の実施方法や評価基準を検討すべきだと再認識する機会となった。

また、ネット配信授業は学生の学習環境や通信環境を考慮し、臨機応変に対応しなければならない。学内の支援制度や設備について把握し、学生に適切な案内をすることも授業担当者も役割だと感じた。

今回の実践を、一時しのぎではなくこれからの授業のあり方を考えるための過渡期とし、対面であれ、非対面であれ、どのような形態であれ、学生の学びを促進させる授業づくりを目指したい。

<参考文献>

コリア語教材研究会 (2013) 『実用韓国語 2』改訂第3版、同志社大学生協書籍部
福原紀彦 (2021) 「濁流のなかに清流を見極める姿勢で築くニュー・ノーマル」

『IDE : 現代の高等教育』627、IDE 大学協会、pp. 19-22.
同志社大学 学習支援・教育開発センター (2021) 『CLF report』32、同志社大学
学習支援・教育開発センター
内山伊知郎 (2021) 「行動制御の心理と良心」同志社大学 良心学研究センター編
『パンデミック時代における良心』良心学研究センター、pp. 116-123.

著者名 : 趙 智英 (Jiyoung Cho)

連絡先 : cjiyoung1120@gmail.com

- ・受付 : 2021 年 3 月 25 日
- ・修正 : 2021 年 3 月 29 日
- ・掲載 : 2021 年 3 月 31 日

日本韓国研究会第1回例会後記

飯倉 江里衣 | 歴史世話人・総司会

2021年3月15日(月)13時より、オンライン(Zoom)上において下記の内容で第1回研究例会を開催いたしました。

【第1報告】

柳川陽介氏「文芸誌『文章』(1939-1941)の「古典」認識について」

司会：高橋梓氏

【第2報告】

金貴仙氏「對話文에 나타난 증결어미에 대한 考察—新小説 ‘花世界(1910年)’를 중심으로—」

司会：崔銀景氏

【第3報告】

趙智英氏「説話における夢語り—日韓比較の観点から—」

司会：高橋梓氏

弊会にとって初めての研究例会でしたが、平日にもかかわらず、24名もの方にご参加いただきました。

私自身は朝鮮の植民地期および植民地解放直後の歴史が専門のため、朝鮮の文学と言語に関する研究報告を聞くのは新鮮かつ貴重な経験でした。しかし、扱われた素材は植民地期に発刊された文芸誌や新聞紙上の小説、高麗王朝・朝鮮王朝時代の歴史書や地理書などの歴史的史料であり、大変興味深く三報告を聞かせていただきました。弊会は多様な分野の研究者が集まる場であるため、各分野の学会に比べたら専門的な議論には至らないかもしれませんが、報告者は他分野の研究者から、いつもとは異なる視点の意見を聞くことができ、参加者も朝鮮研究に関して幅広く学ぶことのできる場であると感じました。

次回の12月の第2回研究例会もさらに盛り上げていけたらと思っております。

崔 銀景 | 語学世話人

항상 학회에서 보기만 하던 사회를 직접 해 본 것은 처음이라 많이 떨리고 긴장되었습니다. 어학 분야를 담당하고 있기는 하지만 제 전공과는 조금 거리가 있는 내용이라서 미리 발표 내용을 읽어보며 모르는 부분에 대해 찾아보기도 했습니다.

제가 사회를 맡았던 김귀선 선생님의 발표는 신소설 화세계의 대화체 어미가 어떻게 나타나는지 격식체와 비격식체로 분류하여 당시 어떠한 어미가 쓰였는지 알아본 내용이었습니다.

소설과 같은 문학 작품들은 그 시대를 살고 있는 사람들의 언어 생활을 반영한다고 합니다. 물론 소설에는 작가가 창작한 허구적인 내용도 포함되기에 소설만으로 그 시대를 알아보는 것은 어렵겠지만 녹음이나 영상도 흔하지 않은 그 시절의 대화 양상이 문자로 표현된 부분은 높은 연구 가치가 있다고 해야 할 것입니다.

전공 분야와 조금 다른 연구를 들으면서 매번 생각하는 것은 연구 내용은 달라도 연구를 진행하는 흐름이나 뼈대 등은 거의 비슷하다는 것입니다. 연구 방법에는 어느 정도 틀이 있고 그 틀에 맞추어 논지를 전개하는 것이 발표를 듣는 청중들과 논문을 읽는 독자들로 하여금 더 잘 이해할 수 있도록 돕는 것 같습니다. 이번 연구회를 통해 다양한 분야의 연구 발표를 듣는 것이 얼마나 도움이 되는지 다시 한번 느낄 수 있었습니다.

高橋 梓 | 企画委員

第一回例会において、私は「文学部門」の柳川陽介さんと趙智英さんの個人報告の司会を担当しました。柳川さんの発表「『文芸誌『文章』(1939-1941)の「古典」認識について」では、植民地期の「純文学雑誌」として知られる雑誌『文章』が、朝鮮の古典文学を多く紹介したという点について注目しながら、『文章』という雑誌が朝鮮文学史において持つ意味について新たに提示しました。また、趙智英さんの発表「説話における夢語り—日韓比較の観点から」は、日本と韓国の説話において「夢語り」「夢解き」「夢の売買」がそれぞれどのように描かれているかについて比較しながら、日韓の説話を新たな側面から読み直すものでした。お二人の発表は対象とする時期は異なるものではありませんでしたが、それぞれ朝鮮文学史と日韓の説話を新たな視座から読み直そうとするという点では共通しており、朝鮮近代文学を研究する私にとって非常に刺激的な内容でした。また、お二人のテーマは今日の韓国における古典文学のあり方や、日韓における夢をめぐる認識など、Zoomによる開催でなければより活発に議論が交わされたのではないかと思います。研究者同士が直接出会い、交流が活発に行われる日が一日も早く来ることを願ってやみません。

趙 智英 | 文学世話人

일본한국연구회 제1회 연구예회에서 저는 「説話における夢語り—日韓比較の観点から—」라는 제목으로 발표했습니다.

한국과 일본의 꿈 신앙에 대해서는 국문학 뿐만 아니라 민속학, 심리학적으로 다양한 분야에서 논의 되어 왔습니다. 예로부터 전해져 온 꿈에 대한 믿음과 꿈이 가진 힘이 발휘되기 위해서는 어떤 꿈을 꾀는지를 누군가에게 이야기하는 과정이 필

수적이며, 이 과정은 한국의 삼국사기와 삼국유사, 고려사, 그리고 일본의 소가모 노가타리 등에 나타난 해몽과 꿈 매매가 이루어지기 위해서도 반드시 거치는 과정입니다.

이번 발표에서는 꿈을 이야기하는 과정에 초점을 두고 꿈을 누구에게 이야기하는지, 꿈을 이야기함으로써 그 꿈이 가진 힘이 어떻게 발휘되는지, 꿈을 발설하지 않는 경우는 어떻게 되는지에 대해서 관련된 사례를 조사하면서 꿈의 발설, 해몽, 꿈 매매가 이루어지는 여러 설화를 검토해보았습니다.

발표시간의 관계로 최종적인 마무리에 이르기까지 자세한 설명을 생략할 수 밖에 없었던 내용도 있었기에 다음 기회에 내용을 재정리하도록 하겠습니다. 사회를 맡아주신 이이쿠라에리이선생님, 다카하시아즈사선생님, 최은경선생님, 여러 가지로 수고해주신 사무 담당 선생님들 모두 감사드립니다.

研究会会則

第1章 名称および事務局

第1条

本研究会は、日本韓国研究会と称する。英語名は Japan Association of Koreanology（略称 JAK）とする。

第2条

本研究会は、主たる事務局を関西地区に置く。

第2章 目的および事業

第3条

韓国・朝鮮研究の発展に資することを目指し、言語・文学・歴史・文化・政治経済など多様な分野にわたって幅広く学術情報を発信することを目的とするとともに、1. 研究者相互の交流を通じた韓国・朝鮮研究の活性化、2. 若手研究者が活躍できる場の創出、3. 若手研究者への研究支援を研究会の理念として掲げる。

第4条

本研究会は、年2回の研究例会（3月と12月）と年に1回（8月）の研究発表大会を開催する。開催地、期日は運営委員会で定める。

第5条

本研究会は、年1回研究会誌（オンラインジャーナル）を発行する。

第3章 会員

第6条

本研究会の会員は次の通りとする。

1. 一般会員：本研究会の目的に賛同する個人および団体
2. 維持会員：本研究会の目的に賛同し、所定の維持会費を前納する個人および団体

第7条

会員は次の権利を有する。

1. 研究発表大会の予稿集および研究会誌などの配布案内
2. 研究会誌への投稿
3. 研究発表大会での発表、その他、本研究会の行う行事への参加
4. 役員選挙における選挙権ならびに被選挙権

第4章 入会および退会

第8条

本研究会に入会を希望する者は、所定の手続きにより申し込むものとする。本研究会会員で退会を希望する者は、その旨を本研究会に通知しなければならない。

第5章 役員

第9条

本研究会の役員は、会長1名、事務委員2名、編集委員2名、会計委員2名、企画委員2名、世話人若干名、顧問若干名とする。任期は2年とし、再選を妨げない。

第10条

本研究会の会長は事務局を置き、必要な事務担当者を委嘱することができる。

第11条

運営委員会および世話人会は、原則として研究会の際に開催する。ただし、本研究会の会長は必要に応じて臨時に召集することが出来る。

第6章 会則の改定

第12条

本研究会における会則の変更改定は、運営委員会の発議と世話人の3分の2以上の同意を得なければならない。

2020年12月27日 制定

2021年1月18日 改定

投稿規定

1. 投稿資格

投稿者は原則として日本韓国研究会（以下、本研究会）の会員に限る。

2. 投稿内容

他研究誌・学会誌などに未掲載のものに限る。原則として、本研究会の例会または大会で発表されたものとする。但し、本研究会の判断により、掲載が必要とされる場合はこの限りではない。

3. 使用言語

日本語や韓国・朝鮮語、英語（事前に相談する）とする。

4. 投稿原稿の種類

- ・研究論文：独創性を有する論文
- ・研究ノート：萌芽的な考察もしくは論考
- ・実践報告：実践活動から得た成果
- ・書評：出版物に対する短評

5. 投稿締切

毎年、6月末日とする。

6. 発行

毎年9月末日に本研究会のホームページにて電子化（pdf形式）して公開する。

7. 投稿方法

Eメールにて投稿を行う。

投稿時、以下の内容をメール本文に必ず入れること。

- ・投稿者の氏名（英文表記も含む）
- ・投稿者の所属
- ・投稿原稿の種類（研究論文、研究ノート、実践報告、書評）
- ・原稿のタイトル（英訳も含む）
- ・連絡先（メールアドレス）

送付先（編集担当）：jak-henshu(at)gmail.com * (at)は@に変更してお

送りください。

8. 著作権

掲載された原稿の著作権はすべて本研究会へ帰属するものとする。

9. 査読

掲載の採択可否について複数名による査読を行う。

10. その他

投稿要領で指定されているフォントまたは体裁以外の書式がある場合は、事前に相談すること。

 運営委員

海外顧問	韓 昌勲（全北大学）、崔 順育（ソウル神学大学）
日本顧問	任 炫樹（帝塚山学院大学）、辻 大和（横浜国立大学）
会長	河 正一（大阪府立大学）
大会	高橋 梓（高麗大学）
例会	飯倉 江里衣（神戸女子大学）
企画	高橋 梓（高麗大学）、金 根三（立教大学）
編集	趙 智英（同志社大学）、崔 銀景（長崎外国語大学）
広報	徐 明煥（群馬県立女子大学ほか）、小高 理子（朝日出版）
会計	朴 庾卿（明治学院大学ほか）、丹羽 裕美（ひろば語学院）
事務	渡邊 香織（千葉大学大学院博士後期課程） 仲島 淳子（近畿大学ほか）
語学世話人	崔 銀景（長崎外国語大学）
文学世話人	趙 智英（同志社大学）
歴史世話人	飯倉 江里衣（神戸女子大学）
文化世話人	朴 庾卿（明治学院大学ほか）
政経世話人	金 根三（立教大学）

日本韓国研究 特集号

発行日 2021年3月31日

発行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪府立大学 高等教育推進機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) [jak.jimu\(at\)gmail.com](mailto:jak.jimu@gmail.com) *(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編集 趙智英 崔銀景

日本韓国研究会 
Japan Association of Koreanology